

# 麗澤教育

第19号

平成25年(2013)4月

特集 麗澤大学のキャリア教育



## 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年1回発行しています。

# 麗澤教育 第十九号 〈目次〉

フォト・アルバム 校舎「あすなる」Gデザイン賞受賞・「はなみずき」オープン……………6

〈特別寄稿〉 タイ・ベトナム訪問記……………渡邊 信 8

〈特集〉 麗澤大学のキャリア教育——キャリア教育の重要性……………15

〈特集①〉 キャリア教育への思い……………真殿 達 18

〈特集②〉 キャリア教育科目

麗澤大学の「キャリア教育科目」の……………石光 俊明 26

これまでと、これから

「麗澤スピリットとキャリア」について……………丸 知里 30

女性のキャリア……………関根 那美 33

麗澤大学のキャリア支援をうけて……………清水 晴菜 35

〈特集③〉 キャリア支援の取り組み

キャリア支援の目指すモノ……………川瀬 達也 37

↳百人百通りの支援

企業情報の提供……………小田中悦子 46

就職支援における好循環のスパイラル……………長谷川善仁 50

キャリアセンターに勤務して……………中嶋 信隆 54

〈特集④〉 成長の機会

「誰かのために」お世話をする……………齋藤 音羽 56

↳後輩へのサポート

柏レイソルインターンシップに参加して……………山本 千晴 59

「聞き書き」で大空に飛ばたく君へ……………小田 豊二 61

〈特集⑤〉 キャリア支援を通じて思ふこと……………米田 隆彦 65

フォト・アルバム この一年……………70

【創部50周年】

麗澤大学剣道部創部50年……………藤井 敬三 72

    ↳ 剣道を学んで

難ありて有難し……………富田 裕之 78

    ↳ 麗澤空手50年の人づくり

【卒業生の今】

趣味が支えてくれた独立……………武士侯尚也 84

人と出逢い、言葉に導かれて……………本間 泰司 89

ドイツとの出会い……………別所 涼子 93

【課外活動：英語劇グループの学外公演】

仲間と掴んだ夢の舞台『レ・ミゼラブル』……………根本 元気 97

真のコミュニケーション能力を培う英語劇……………マイウイントリアキン 99

    ↳ HARD-WORKING, BUT HAPPY!

【新任教員セミナー】

転機の夏……………圓丸 哲麻 102

コラム

支援の先に見える差別化された大学……………井上 貴広 109

職員としての私の使命……………松野 大祐 113

    ↳ ホームカミングデイを通して

そこまで本気になるワケ……………高安美紗稀 117

活動報告

震災ボランティア 学生の持続的な活動……………麗澤大学聞き書きサークル……………121

私は、あなたを忘れない……………123

    ↳ 命はひとつ、ひとりにひとつ

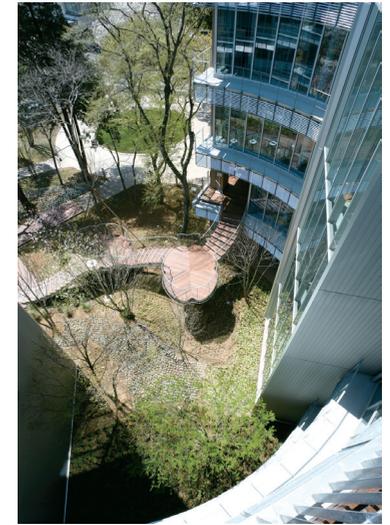
【図書紹介】……………125

\*寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十四年度です。

## 校舎「あすなろ」が2012年度グッドデザイン賞を受賞



「仁草木に及ぶ」(慈しみの心を、人間はもとより植物にも及ぼす)。この倫理的自然観に基づいた、キャンパス・デザインのコネクト「森との共生」が高く評価されました。



## Reitaku Student Plaza “はなみずき”

地域に密着した複合施設「Reitaku Student Plaza “はなみずき”」がグランドオープンしました (2012.3.31)。

100人による  
オープニング・テープカット



柏レイソルダンサーズ



はなみずきホールで行われる多彩なイベント



Reitaku Café



武術太極拳部による演武



18,000個のLED電球のイルミネーションが灯りました (2012.11.29~12.25)

# タイ・ベトナム訪問記

外国語学部長 渡邊 信



本学外国語学部の目標は「国際教養人」、今はやりの言葉を使えば「グローバル人材」の育成である。経済成長の続くアジアを主力拠点に据える日本企業が年々増加している中、アジアに詳しい人材を輩出することは私たちの使命の一つだろう。「国際教養人」育成には留学制度の充実が必要であることは言うまでもない。

外国語学部の学生のアジア地域への留学を後押しすべく2013年度より釜山外国語大学校(韓国)、実践大学(台湾)、ソングラナ・カリン大学ブーケット校(タイ)、サイアム大学(タイ)、パヤップ大学(タイ)と交換留学制度を開始する予定である。

いらしくフライト・アテンダントのホスピタリティは素晴らしかった。現地時間16時過ぎ、中山学長と堀内先生と空港で待ち合わせバンコク市内のシェラトンへ。19時から同ホテル内レストランBasile「麗澤大学」タイ同窓会となった。前日の11月3日には本学柏キャンパスで第9回ホームカミングデーを行ったばかりなので2日続きの、しかも4700キロを隔ての同窓会だ。15人の卒業生に集まっていただき本当に和やかで楽しい会となった。外国語学部、国際経済学部(2008年経済学部改組)、大学院、留学生と、麗澤大学時代の所属は違っても麗澤で「同じ釜の飯を食った仲間」である。麗澤の卒業生はたくましく生きている。現地の大学で日本語を教えている方も数名おり(特に大学院日本語教育学専攻出身のマツナリ博士はNaresuan University、Department of Oriental Languagesの学科長)、そういう大学と今後提携できないか模索していけば麗澤とタイとの関係もますます深まって行くだろう。旧英語学科出身の村松正章さん(現在は日本企業現地法人のDeputy

外国語学部は2012年度の「重点目標」の一つに「タイ政策」を掲げた。この中でタイとベトナムの高等教育機関との交流、および学術・教育協定へ向けて前進すべく、2012年11月4日〜11日の8日間、中山理学長、堀内一史国際交流センター長とともに、バンコク、プーケット、ホーチミンを訪問した。その行程をレポートしたい。

## 1 「麗澤大学」タイ同窓会

11月4日。3人別々のフライトでバンコク入り。私は、午前10時45分成田発のタイ航空便で4700キロの距離を7時間弱で飛んだ。「微笑みの国」タ

Executive Manager)、阿部明日香さんと会えたのは英語の教員としては感慨もひとしおであった。

## 2 「王宮」と「メデイカル・ツーリズム」

11月5日、チェンマイに行く予定であったが急遽キャンセルになったためやや時間に余裕があった。そのため「王宮」を見学することができた。1782年に建設され、国王の宮殿、即位式の建物、王室守護寺院などの他、宮内庁や官庁などの建物が壁に囲まれた広大な敷地内に建てられている。仏教国としてのタイと、仏教をその



卒業生の皆さんとタイ同窓会で和やかな時間を過ごす

文化の重要な一部とする日本の共通点を見た思いがした。

午後は、Bunrungrad International Hospital 日系市場セグメント・マネージャーの田村優子氏に院内を案内していただいた。本来はタイ富裕層対象の病院であったが、現在はバンコクの「メデイカル・ツーリズム」の中心でもある。2013年度4月よりバンコク市内のサイアム大学と交換留学を開始するが、麗大生が留学中に万一体調を崩すことがあっても田村氏がいるから心強い。

その後、国際交流基金バンコク日本文化センター所長福田和弘氏、スミタカルチャーセンター社長住田千鶴子氏とバンコク市内の中華料理屋「養生堂（ヤンセンタン）」で会食、タイにおける日本企業の進出状況、日本人の生活や日本語教育の現状についての情報・ご意見を拝聴した。住田氏は昨日の本学同窓会に参加してくれた国際経済学部出身で財団法人国際労働財団タイ・フィールドマネージャーの関口輝比古氏の元上司だった方だ。タイ社会で活躍さ

れている本学ゆかりの方々とできるだけつながり「海外インターンシップ」の充実に将来つなげたいとの思いを一層強くした。

### 3 ソンクラナカリン大学プーケット校

11月6日、バンコク・スワンナプール国際空港から空路プーケットへ。1時間弱のフライトは超満員であった。正午すぎに空港に着き、ホテルまでは1時間弱。14時30分にソンクラナカリン大学プーケット校 (Prince of Songkla University; 略称はPSU) の小山先生とホテルで待ち合わせ15時より当該大学でブトラット副学長、ソントヤ国際学部長、ジラサック韓国研究学部長、ケシネ国際関係学部長他の皆さんと提携拡充協議を行った。本学ドイツ語・ドイツ文化専攻コーディネーター山川教授が粘り強く交渉を行ってきた結果が実を結んだものだ。本学とPSUは2010年6月に包括協定を締結。外国語学部は「異文化研究D」として短期研修を3回、30名近い学生を送り出した。2011年にはPSUより

1名の特別聴講生を受け入れている。2013年度よりPSUと念願の授業料免除での交換留学制度が始まる。双方とも半期いずれかに最大3名を交換する、本学から参加する場合はTOEIC500点以上等が留学条件で、PSUからは日本語能力試験N4級以上が科せられる。PSU国際学部は、中国語、韓国語コースの他に、2013年にはアセアンコースを、2014年ごろに日本語コースの開設を計画しており、麗澤との関係は徐々に強まっていくだろう。会議の後は和やかな雰囲気の中、海辺のレストランで会食を行い、両大学の将来について思いを膨らませた。

### 4 サイアム大学

11月7日、バンコクにとんぼ帰り。市内にあるサイアム大学との意見交換および、「包括協定書」「交換留学に関する覚書」への調印式を行った。サイアム大学からはポーンチャイ学長、ニムヌアン副学長、ウサニー副学長、高田知仁先生他が出席され

た。年2名の学生を1学期間授業料・寮費免除で交換する。麗澤からの参加条件はTOEIC500点以上、インターナショナルコース（ビジネスまたはホテル・ツーリズム）の授業から履修科目を選択する。サイアムからは日本語能力試験N4級以上が条件となるが、既に日本語専攻のアピンヤーさんとサラワンさん（いずれも女性）の2人が4月から麗澤大学で学びたいと手を挙げてくれている。2人とも聡明で親切、日本語も上手な努力家だ。バンコク市内はタイ系、インド系、中国系のタイ人と各国のビジネスパーソンとその家族からなる多文化社会だ。麗澤大学の学生にとって貴重な経験になることは間違いない。



サイアム大学にて

11月8日、本学卒業生の中村寿男氏（麗澤大学第36期、イギリス語学科卒業、島根県松江市の「中村茶舗」代表取締役）が出資する「Chahho（正式な社名はHealthy Ho Co. Ltd）」にお邪魔した。「日本茶のスタバ」と言えばイメージが伝わるだろうか。Central World Plazaのラッシュショッピング・モールの4階にあり、タイで現在7店舗を展開中で、年内にあと2店開店するそうだ。「異文化研究D（タイでの短期研修）」に参加した外国語学部が2012年8月にお邪魔したお礼と、海外インターシップで学生を受け入れていただけの打診するためだ。お店では中村氏と社員ピムペスさんから事業形態について丁寧に説明を受けた。日本茶はタイの富裕層に健康飲料として受け入れられているそうだ。商品は、鮮度保持のため、船による輸送ではなく日本から空輸されている。「お茶と言う商品と共に日本文化を輸出している」という中村氏の言葉が

印象的だった。本学卒業生が海外で展開する事業が成功しているのを見るのは嬉しい。

## 6 ベトナム国家大学ホーチミン市校

11月8日、18時25分の便でベトナム・ホーチミン、タンソンニャット国際空港に移動。ホテルに移動しベトナム国家大学ホーチミン市校、社会・人文科学大学（Vietnam National University in Ho Chi Minh City, University of Social Sciences and Humanities）のフー日本学副学長（通称「かおり先生」、以前より同大学に日本語教材を提供している本学の関連法人



ベトナム国家大学ホーチミン市校にて

である公益財団

法人モラロジー

研究所上信越ブ

ロック長の西田

誠氏らと翌日の

講演会などにつ

いて打ち合せた。

翌9日は午前

8時に学生さん

に迎えに来ても

らいタクシーで

大学入り。カー

ン副学長、ルッ

ク日本学科長、フー日本学科副学長らとそれぞれの大学の特徴などに関して情報交換した。

その後講堂に移動し、いよいよ講演会となった。

学生さん数人の日本語の歌が始まり、賑やかで和やかな雰囲気だった。時間に若干の遅れはあったが、おおむねスムーズにいった。



講演する中山学長（通訳は「かおり先生」）

以下がプログラムである。

- 9時25分～9時50分 開会挨拶
- 9時50分～10時15分 渡邊・「麗澤大学での学びについて」
- 10時15分～10時40分 堀内教授・「松下幸之助の道德的経営」
- 10時50分～11時50分 中山学長「21世紀の日本と道德の再構築」
- 10分間の質疑応答

質疑応答では多くの学生が手を挙げ、正直驚いた。実際ああいう場面で質問するには勇気がいるだろう。一生懸命日本語で質問する学生の姿に燃えるような向学心を感じた。現在ベトナムには1500社近い日本企業が進出していると聞く。近い将来、彼らはそうした企業で重要な役割を果たすだろう。

19時からは統一会堂（旧大統領官邸）において本学の中山学長がホストとして夕食会を行い、セン学長他を招待した。ベトナム国家大学の学生もカラフルなアオザイを来て参加してくれた。

## 終わりに

今回のタイ・ベトナム出張を通してまず感じたのは対日感情の良さである。留学関係のパートナーシップは極めて安定的に運用できるだろう。

ソクランナカリン大学プーケット校およびサイアム大学とは交換留学を始めることになった。前者が世界的なマリン・リゾート、後者が首都バンコクを中心地にあるということで棲み分けができよう。失業率0・6%が示すようにタイはまさに好景気に沸いている。治安も悪くない。2011年6月～9月の記録的大雨で国土を縦断するチャオプラヤ川が増水し堤防が決壊、450の日系企業が被害を受けたことは記憶に新しい。ただ洪水後も日系企業によるタイへの投資は加速しており、2012年1月～6

月の日系企業の直接投資額は前年度比2・4倍だ（「日経新聞」2012年11月5日）。この好景気が永遠に続く訳ではないだろうが、タイの言語と文化に関する知識を深めることは本学学生の卒業後のキャリアにとってきつとプラスに働くことだろう。

専攻語以外の言語が主言語の国・地域の提携大学に留学し専攻語と当該国の言語を修得する「クロス留学」を外国語学部は推奨してきた。本学部独自のプログラムだと自負している。タイへ留学するのは主に英語2専攻、IECの学生およびドイツ語・ドイツ文化専攻の学生で、彼らにとってタイ留学はまさに「クロス留学」である。この新しい方向性を大切に育てて行きたい。

\*本稿は本学「学長室Website」に掲載した「タイ・ベトナム訪問」で私が執筆した部分を加筆・訂正したものである。

【参照】<http://www.reitaku-u.ac.jp/president/essay/20121113-5059.html>

## 〈特集〉麗澤大学のキャリア教育——キャリア教育の重要性

大学教育の課題は「知性と行動力をもったたくましいリーダー」を育成し、社会の発達、人々の幸福に貢献し、充実した人生を送ることのできる人材の育成にあります。学生は授業を受けることよって専門的な知識を獲得し、学士として知力を身につけていきます。専門的な知識を身につけるほど、それを活かすための力が必要となります。つまり、広く深い知識を身につけた人は、それに見合ったより豊かな人間力をもとめられるのです。ここに現在、大学生に対して「学士力」とか「社会人基礎力」といった人間力が要請されている所以があります。

しかし、この人間力の育成という課題は正課のカリキュラムだけでなく、学生生活全般をとおして実現していくものです。とりわけ、課外の活動や就職活動をとおして身につける行動力やリーダーシップ、協調性や責任感、いわば

人間的な魅力や実力の原点です。

本号に収めた麗澤大学におけるキャリア教育・キャリア支援に携わるスタッフの手記によって麗澤大学における人間教育の実際を知ることができます。それは「進路支援のみならず、その後の社会人生活や市民生活において最も有用なことを学ぶ」場であり、「就職活動によって多様な価値観や考え方に触れ、これまでの自分を振り返り大きく成長する」ことができ、一人一人の学生にとって「就職活動は自立の過程であり、社会に出て活躍するための自信を付けていく過程でもある」と記されています。

また学生による就職アドバイザーの体験をとおして、「人のために役に立ちたい」という意識を育み、人間としての成長も期待できます。さらに「在学中にキャリア支援という場で育まれた学生と教職員との信頼関係は卒業後も続き、豊かな人生を作り出していく」という大きな効果が期待できます。このような意味においてキャリア支援に関わる本学の教育は大学教育の本来の課題に答えるものであるのです。

また、人間力を養成するということは時代を超えた普遍的な教育の課題です。紀元前の孔子やプラトンといった古人の開いた学校も、江戸時代の文武一致を称えた藩校も、凡そ教育というものは、人間力を養うことがその本来の目的であったのです。今日「学士力」とか、「社会人基礎力」が強調されている

のは、最近の若者（学生）に人間力が弱くなったからということであるよりも、教育の本来の姿にもどれと提唱しているように思えるのです。

人間力の養成という課題は、時代を超えた普遍的な教育の課題であると同時に、今日、文化の進歩に伴って、ますます、その必要性が求められています。

このような意味において本学におけるキャリア教育・キャリア支援は、人間教育を掲げる麗澤教育の一翼を担うものと確信いたします。

（麗澤大学学長補佐 井出 元）

# キャリア教育への思い

キャリアセンター長・経済学部教授 真殿 達



## 1 リーダーシップの危機

大学に奉職して思ったこと

銀行員を辞めて大学教師になったとき、良い人材を育てたい、と思いました。31年間もサラリーマン生活を送ってきたのに、心から尊敬できる人物は少なかった、あるいは、出会うことがなかったのかもしれない、という思いがありました。

辛口に過ぎるかもしれませんが。私に目をかけ引き上げて、可愛がってくださった方はおいでになりました。いわゆる「恩にきる」方々です。しかし、尊敬できたかどうかは別でした。

忘れがたい、尊敬できるかもしれない人物はおられました。そのすべては外国人でした。海を隔てて

いますので、机を並べて仕事をしていたわけではありませんが、付き合いは長く続きました。十人十色というように個性は様々なのに、共通点が多くあります。例外なく「自分」のある方々でした。志がありました。自分で決めたことに責任を取る器量をお持ちです。大らかで朗らかだけれど、察する力、見抜く力をお持ちで、粘り強く、懐が深い人々でした。皆さん努力を惜しまない働き者でした。その道のプロであるという自負心が強いのに謙虚でした。どんなに日本のことを深く勉強した人でも、「日本

のことは日本人であるお前が一番知っている。教えてくれないか」という態度で接してくださいました。可愛がってくださったとか恩にきるような親切をいただいた、ということではないのに、何かある都度、その方に相談したい気持ちになり、薫陶を受けてもつともつと立派な人間に成長しなければいけない、と内なる私を鼓舞するような方々でした。

大学に身を投じる以上、たくさんの方々に出会い、いずれはそうした人材に育っていくような何らかのきっかけを与えることができたらしい、と思っただけです。その思いは幸運にもキャリア教育科目を担当するようになってますます強くなってきました。

ポードルームの不良資産

90年代の半ばでした。その尊敬できるかもしれない人物の一人が出張で訪日されました。ある席で私に「日本経済、特に、金融セクターはどうすればよくなるかと思うか？」と尋ねられ、私は反射的に「問題銀行のポードルームの不良資産を一掃すべきだと

思う（重役たちを総退陣させるべきである）」と返答してしまいました。すると、虚を突かれたような顔をされて「そういう言葉を日本の若者（その方から見れば私は40代半ばの若造でした）に言われるとは思ってもよらなかった」と返され、やや間をおいて「自分もそれしかないと思っている」と応じてこられました。お互い公式には言ってはならない発言でした。私は、銀行の現場を通じて不良資産を作った人々が如何に無責任なのか、卑しい人格なのか、いやというほど見ていました。その方もおそらくそれまで出会った日本の金融マン達をそのように値踏みされていたのです。

そのような展開になった以上、もう遠慮無用です。「日本によくおいでになるが、立場を離れて尊敬できる日本のビジネスマンに会ったことがあるか？」とお尋ねしました。はにかむように笑いながら「正直なところ、いない」。そして「個人的な関係になるような魅力を感じる人はいないね」と続けました。締めくくりは「だから、大切な議論や相談

相手にはならないんだよ。会社の地位に応じて物事を処理しているだけだよ。長い関係はできないよ。案件ごとの business associate（仕事仲間）ではあっても friend（ともだち）にはならないよ」でした。

外国の CEO と真剣勝負で対峙し、説得し合えるような人材は金融界にはいなかったということ。部下の振りつけるままに外交辞令を言い、あいまいな笑顔で握手するだけの日本の CEO に外国のカウンターパートは実は辟易としていたのです。極端な言い方かもしれませんが、日本のエリートといわれる人々の実態はそういうことでもあったのです。当時はバブル崩壊直後で日本の力はまだ大きく、「人材不足だ」という指摘は憚られたのですが、失われた10年は20年となり、今は万人が公然と認めるようになったと思います。

#### いわゆるリーダー

2011年3月11日以降の様々な不幸な出来事に対する日本のリーダーとされる多くの人々の対応は悲しいほどお粗末でした。昔から、水面下では、

「日本は集団では何とかなっていても個々人の実力や見識、リーダーシップにおいては、ダメな国」とされてきたのです。

福島の事故が起きたその瞬間に東京電力の経営者は何を言うべきだったのでしょうか。「私だったら」という言い方は禁句なのでしょうが、あえて、私だったら「すべての責任は自分が取るから一番良いと思うことをやってくれ。自分は技術的なことはわからないから、現場では専門家として、被害を最小限に食い止めるために最良と思うことをしてくれ。あらゆる手段を講じてくれ。そのためには何でも私の命令だと言って何をして構わないから」と発電所の人々に伝えました。誰だって同じことを言うでしょう。それが常識というものです。しかし、その常識が欠如していました。

日本の社会には様々なしがらみが積み重なり、問題が生じた時に上に立つ人間が本当のことを言えなくなっているところがあります。「言えない」と思ううちに「言わなくなり」、それがまた「言えない」

い」のマグニチュードを大きくしてきました。下手な質問を招かないような、大局的に聞こえるような、あいまいだけれどもっともらしく聞こえることを言い続けているうちに、みんなが本質から遠ざかり、社会全体が本当のことを言わなくなってしまうような気がします。こうした社会でうまく対応することを求められるうちに、尊敬されないリーダーがたくさん生み出されるようになったのです。

世に言うエリート教育を受けた者たちがしがらみの中でたうち回るうちに、本来リーダーに備わるべき徳が忘れられてしまったのです。いわゆるエリート教育自体がしがらみの中から形成されてきたものかもしれません。武士道に貫かれた日本の伝統精神は何処に行ったのでしょうか。研ぎ澄まされた精神で、物事そして自分と向き合うことは、しがらみの中で言葉巧みに世を渡ることと真逆のことです。

いわゆる良い大学を出て良い会社に入り、エスカレーターに乗って年輪を重ねているだけで、徳は備わるのでしようか。真実と向き合おうとする気概が

涵養されるのでしょうか。逆に、大勢順応型の人材育成に狂奔しているだけなのではないのでしょうか。どうしたら「軸のぶれない己に責任の持てる人材」を育成することができるのでしょうか。

## 2 教育への思い

### 実質のある人々

尊敬できる人材に出会わなかったことは、いなかったことではありませんでした。麗澤大学に奉職し、キャリアセンターの仕事に仰せつかり、経営者にお目にかかる機会に恵まれるようになりました。会社を独力で築き上げるとか、小さな家業を世界的な企業に発展させてこられた経営者のところに、学生諸君の就職のお願いに参上するようになったのです。今度は逆に、日本には優れた人材が多いのだ、と思うようになりました。

海外のビジネスエリートと共通するものを持っておられたのは大企業の経営者たちではなく、起業家精神旺盛な、どちらかというと、たたき上げの方々

でした。逆境を撥ね返してきた強さに丸み加わり、従業員や取引先、さらには世間を思いやる温かみや優しさを感じさせる方々でした。私が銀行員時代にお目にかかった方々は皆サラリーマンのなれの果ての経営者に過ぎなかったのです。何かを独力で築き上げた方ではありませんでした。

自分で道を切り開いてきた方々は形式や恰好を気にしない実質の人でした。飾ることがなく、ざっくばらんな親しみやすい雰囲気でした。心の支えにした理念や生き方をわかりやすくお話になりました。

不器用な私は一度や二度の挨拶では済まされない、企業や経営者をいろいろな場面やルートを経て骨の髄まで理解させていただいた上でないと、学生諸君に就職を薦めるのは無責任ではないかと考えています。印象に残る企業や経営者には繰り返しお目にかかるように心がけてきました。ご迷惑をかけた結果、謝りに行くような機会でも、積み重ねていけば御理解いただけるようになりますし、その中で私たちも経営者の心根や歩んでこられた道をご案内い

ただくことになります。

傍から見れば、とてつもない経験、途方もなく大きな知見をお持ちの経営者ほど謙虚で、道を極めてこられたにもかかわらず常に己を磨くこと、修養を積むことに熱心です。若き日から何事に対しても、前例にとらわれず、どうすれば良くなるのか、創意工夫を凝らして、成功に至っても満足することなく、どん欲にさらに上を目指しておられるのです。青春時代から変わらない志は、努力の年月を経て独自の経営哲学と人間性に昇華されています。

こうした出会いで、いつも感じるのは、優れた経営者がお話になる理念は麗澤大学の創立者廣池千九郎博士の思想と重なっていることです。麗澤大学創立の精神と筋の通った企業経営の理念はどこか繋がっているのです。知徳一体、道経一体の意味するところがほんやりと見えてきました。

#### 直接学が

昨今、若者の保守化や安全志向が目立つようになりました。海外への飛躍を目指す若者は激減してい

ます。実際に、型にはまった行動が目立ちます。考えながら新しいことに挑戦するという印象が希薄です。マニュアル化した学生生活や毎年同じイベントや出し物を繰り返す学園祭などは、全国の大学に共通してみられる現象かもしれません。私の住む隣町にある大学の学園祭を訪れた友人が、あれでは気の利いた高校の学園祭以下だと吐き捨てるように言っていたのが忘れられません。

こうした学生たちの活動ぶりは、自らを磨き、苦労を重ねた末に事業を立ち上げてきた人々とは全く反対の動きです。何かに挑戦する、つまり、前向きに進もうとすれば、「従来通り」や「前例踏襲」「マニュアル通り」「初めてのことは手を出さない」というわけにはいかなくなります。必ず、何らかのリスクを伴うのです。しかし、そのリスクを承知の上で行動しないと大きな達成感を得られないのです。若者が何事も安全運転というのはいかなるものでしょうか？ 麗澤の学生も全体としてみれば例外ではありません。それでは、世の中に出て、大勢

順応型という行動様式しか取れなくなってしまう。皮肉なことに、就職試験の現場で、試験官に何の魅力も与えられないことになります。若さを何につけるのか、自分を見つめてほしいと思います。大学も多少のことには目をつぶるくらいでないといけないと反省しきりです。

かくなる上は、是非、私と同じように優れた経営者から直接に学んでもらいたいと思います。優れた人格にまみえることよってのみ理解できる思いや心を行動に役立ててほしいと思います。キャリア科目の中で、できるだけ多くの経営者を講師にお願いただこうとしているのはこうしたい思いによります。優れた人生の先輩のお話は面白いですね。若者たちは本当の話には耳を傾けるのです。自分で努力し、考え抜いて逆境を克服してゆく、そのような事例を見聞きすることに若者は本来、貪欲なのです。

ただ、求められるのは深さと速度です。大学生活は通常4年でしかありません。学問、語学力アップ、サークル、スポーツ、アルバイト等々、あつと

いう間に過ぎ去ってしまう「かくも短き日々」なのです。それ故に、短時日のうちに鋭角的に、「経営者の心と実際の経営を理解し、大きな経済のうねりの中で企業の舵を取るのはどういうことなのか」臨場感を持って受け止めてもらわなければなりません。学生諸君には大変申し訳ないことですが、こうした経営者から一番たくさん学んでいるのは、何度もお目にかかる機会があるキャリア教育を運営している教職員なのです。学生諸君にもっと私たちの学びを分け与えたいと思います。考えながら行動するきっかけをつかんでもらいたいです。

別な言い方をすれば、生きていくうえで不可欠な「人、企業、産業、経済を見極める目と心」を集中的に学んでもらいたいです。これまで世間のことはおろか、大学の勉強すら十分にやっつてこなかった学生諸君に、人生とビジネスのエッセンスを教えたのです。

#### 自学自修を学ぶ

人生とビジネスのエッセンスを集中講義のように

一挙に刷り込む方途はあるのか。それには多様な学びの道があると思います。その一つ答えになるかもしれないことを、平成25年度から学生諸君と共に挑戦したいと考えています。

私たちが尊敬できる経営者や人物の生涯を学生諸君に調べてもらいたいです。そのうえでご本人（お亡くなりになっていればお身内）や関係者から、お話を聞いてもらいたいです。その人が成し遂げた事業の物語を書いてもらいたいです。生れ落ちてから今日に至るまで（亡くなるまで）、事実を調べ、関係する人々からお話を伺い、人物史、経営史にまとめてゆくのです。社史の作成ではありません。経営者がどのような思いで、どのような苦しみに耐え、どのような志を持って、どのような哲学や教えを支えに生き抜いて、激しい思いを穏やかでいながら厳しい経営理念に昇華させてこられたのか、学生の目と耳で確認し、その方の歴史を書物にまとめる作業をしてもらおう、と考えているのです。その作業を通じて学生諸君は多くのことを学んで

くれると思います。お話を伺う過程で、あいさつや、言葉使いに始まり、決められた時間内での質疑、お話の確認、その前の質疑を用意するための調査など社会人になるための基礎となる行動を身に着けておかなければ、面談ひとつ満足にできないでしょう。アポイントをいただくために、どなたにどうお願いするのも勉強してもらわなければなりませんね。インタビューのテープ起こし、その編集、再インタビューという根気のいる作業をしっかりやらないと、その方の人生を立体的に組み立てていく作業には移れませんね。何よりもその中核をなす事業のご苦労や喜び、その骨格をなす志や理念をどう深め強固にされて行かれたのか、しっかりと深耕しなければなりません。

私たちにとっても大きな挑戦になります。学生諸君のこの作業に伴走することによって、私たちも改めて麗澤大学の建学の精神と経営者の心を学べるのではないかと期待しています。経営者たちが自学自修により仕事も心も高めてきたこと確認すること

は、経営者の心に様々な角度から思い至らせ建学の精神との関係を確認する作業でもあるからです。

大変な挑戦です。しかし私たちには実績があります。麗澤の学生諸君は、昨年11月「みやぎ聞き書き村」の皆さんのご協力を得て、一昨年の東日本大震災の被災経験を『私は、あなたを忘れない』に編集し、麗澤大学出版会から発行しました。聞き書き村の皆さんは高名な聞き書き作家小田豊二氏の御指導のもと、一人暮らしや施設に住まう御老人を訪ね、その自分史を作成してこられました。小冊子にまとめられた自分史を御老人たちは繰り返し読まれ、生気を取り戻していかれると伺っております。冊子がすぐにぼろぼろになると反比例して生気が蘇ってくるのです。『私は、あなたを忘れない』は、冊子を作る側の皆さんの冊子を麗澤大学の学生が編集したものでした。

今度は、麗澤の精神と真正面に向き合って、経営者の心をまとめてもらいたいと考えています。

# 麗澤大学の「キャリア教育科目」の これまでと、これから

キャリアセンター主任 石光俊明



麗澤大学でキャリア教育科目が検討されるようになったのは2006年度からでした。この年は「就職部」から、現在の「キャリアセンター」に名称が変更した年でもあり、麗澤大学にとってのキャリア教育元年というべき年でもありました。当時は全国的にキャリア教育が強く推奨されている時期で、多くの大学でキャリア教育科目が設置されました（2006年の時点で、国立大学は80%、私立大学は70%の大学でキャリアに関する授業科目が設置されていました。参考…〔2006年、(独)日本学生支援機構「大学等における学生生活支援の実態調査」〕。

麗澤大学においても、科目設置のきっかけはそう

践する科目となりました。「キャリア形成研究」は、より実際の就職活動に関わっていく授業で、業界や企業の研究、自己表現能力を向上させるワークを行います。そして、面接やグループディスカッション等を単なる対策ではなく、その本質であるコミュニケーション能力を実践的に学ぶ「キャリア形成演習」で活動前の総仕上げを行い、学生たちは就職活動に飛び込みます。振り返ると、結果的に初期のキャリア教育科目は、自身の進路を考え、職業観を育成する「キャリア教育」よりも、就職活動に向けての対策に関する要素が大きかったかもしれません。しかし、その甲斐あって2007年以降の就職希望者に対する内定率は9割強を保ち、リーマンショック以降の2011年より9割弱に落ちたものの、多くの学生の内定に貢献してきたと感じています。また、キャリア教育科目は教員であるキャリアセンター長と、キャリアセンター職員が就職協同で作り上げたという意味で、大学にとっても非常に重要な意味がありました。

した世の中の流れもあり、キャリア教育科目設置の必要性を感じたところから始まりました。そして翌2007年4月より、2年生を推奨年次とした「キャリア形成入門」、3年生を推奨年次とした「キャリア形成研究」と「キャリア形成演習」の3科目がスタートしました。

「キャリア形成入門」は低学年次から、社会で活躍する卒業生や、本学の教育理念に強く賛同されている外部講師をお招きし、様々な働き方を通して、一人ひとりの進路形成を考える授業です。特に卒業生は6年間で20人以上も講義を引き受けてくださり、卒業生の協力による麗澤らしい「出藍しゆつらんの教育」を实

短い期間で一定の結果を出してきたものの、「キャリア教育」の展開に向けては大きく3つの課題がありました。1つは「キャリア教育科目」を麗澤大学の教育と結び付け、麗澤流の「キャリア教育科目」を構築することでした。これは麗澤大学のみならず、日本の他の大学にとっても大きな課題でした。キャリア教育はそもそも国、産業、大学それぞれの事情から急速に推進されてきたため、大学教育の目的とは別に成立している教育分野になります。これまで本学においても、麗澤流のキャリア教育の構築に向けて頑張ってはきましたが、十分な環境やノウハウがなく、その実現には至りませんでした。そのような事情から兎にも角にも作り上げてきたキャリア教育科目を、本学の建学の理念に基づいた教育内容に再構築し、麗澤流のキャリア教育を作ることに次のステップとして考えられました。2つ目は低学年次からのキャリア形成の更なる強化。3つ目はキャリア教育の全学的な取り組み(就職協同)の実現です。キャリア教育は就職活動や進路の

ことだけでなく、将来社会で活躍するための能力育成も含まれてくるようになり、そうした内面的な能力育成の教育は教員と職員が協力して大学全体で行う必要があります。(日本の大学を取り巻くキャリア教育に関する事情については拙論『麗澤大学紀要 第92巻』(2011年)の29～106ページに掲載されている「大学教育におけるキャリア教育の目的の再考」を参照)。

そのような課題を踏まえ、2009年には初年次推奨の「麗澤スピリットとキャリア」と、女性の働き方を中心に学ぶための「ジェンダーとキャリア形成」の2科目が追加されました。「麗澤スピリットとキャリア」は麗澤の大切にしてある考え方(建学の理念)を学び、それらをどのように学生生活や将来に活かしていくかを考える授業です。また初年次からのキャリア形成を行うことと、総合的な人間力を高めるために「聞き書き」という手法を用いて、様々な人から話を聞き、編集して一冊の本にすることを行っています。この科目が、最も重要な課題で

ある麗澤流のキャリア教育科目を作るための鍵となります。「ジェンダーとキャリア形成」については、更に幅広いキャリア形成を考えさせるために作った科目で、女性の働き方の変遷と実態について、様々な講師の実体験から学び、今後の動向も踏まえながら将来の職業選択について考察します。この科目も「キャリア形成入門」同様、社会で活躍する卒業生や外部講師に多数登場していただいています。女子学生に聞いてもらいたいのはもちろんですが、男子学生も将来女性の部下を持つ管理職になる人もいますし、働く女性のパートナーにもなり得ます。よき上司、よきパートナーが増えることが男女の働き方に関する課題を解決することになるので、ぜひ聞いてもらいたいと考えています。

上記の両科目を含めて、2012年現在に至るまでキャリア教育科目は5科目となりました。先ほど挙げた課題について、今後は更にそれを発展させていくために、本学の道德教育を中心的に計画している道德科学教育センターと連携して、麗澤流のキャ

リア教育の再構築を加速させていきたいと考えています。具体的には道德科学教育センター員の教員にも授業をお願いし、「道德科学」という本学の道德に関する必修科目とのつながりを考え、更に社会で実践的に活かしていくための内容も考えていきます。

また3つ目の課題でも述べたキャリア教育の全学的な取り組みに向けて、キャリア教育で達成できる可能性のあるものを深く研究していく必要もあります。例えば出口と普段学んでいる専門課程や教養課程を結びつけて学習に対するモチベーションを向上させ、意欲や考える力といったジェネリックスキルの向上などがあります。これらは正課教育だけで達成できるものではありません。正課外において教員と職員が同じ教育意識を持つことが重要になります。それらを理論的に支える研究を強化し、その思想を学内で普及させていくことが必要となります。

これまでの6年間を振り返ると、最初の3年はキャリア教育とその科目を立ち上げ、作り上げた創業の期間でした。次の3年はそのキャリア教育科目を

就職支援につながるものではなく、低学年次からの進路形成の強化や、建学の精神に基づいたキャリア教育の構築に力を注いだ展開の期間でした。次の3年はその展開の期間に作られたことを更に深め、全学的に取り組めるよう、道德科学教育センターとの連携や、教職協同による正課外教育の強化体制を作る、普及の期間だと考えています。

私たちは本学の目指す教育理念を、キャリア教育を通じて実現することが、学生にとって進路支援のみならず、その後の社会人生活や市民生活においても最も有用なことであると信じています。麗澤に来てくれたすべての学生が「麗澤大学に来て良かった」と思ってくれるように、この普及の3年間をしっかりと取り組んでいきます。今後の麗澤のキャリア教育にぜひご期待ください。

# 「麗澤スプリットとキャリア」について

キャリアセンター 丸 知里



本学のキャリア形成支援は、1年次からスタートします。1年次推奨のキャリア教育科目が「麗澤スプリットとキャリア」です。この科目には、2つの目的があり、1つ目は「麗澤大学の建学の精神を学ぶこと」、2つ目は「社会で必要なコミュニケーションスキルの向上」です。座学だけでなくフィールドワークやグループワークなどの実践を通じて体得することを重視しています。

「建学の精神」を体感するために1コマをキャンパス見学にあてています。創立者・廣池千九郎が公務員を行っていた「麗澤館」の見学や廣池家の墓参を通して、「人類の幸福と平和」を願う大学の前身とな

る道徳科学専攻塾を開塾したこと、緑あふれるキャンパスは「仁草木じんそうもくに及ぶ」の精神を今も受け継いでいること、そして寮や少人数教育に挙げられるように教職員と学生が刺激し合い共に学びあう「師弟同学」の風土があることなどを学びます。

また、学長補佐・井出元先生はじめの講義では、人のために力を尽くすことを喜びと感じ、自主的に行動することの尊さを自覚している学生や卒業生の事例が紹介され、本学の精神「自修研鑽」「自主自立」、そして「リーダー論」について学びます。例えば、リーダーセミナーに参加した学生の感想文には、自らの経験をもとに次期リーダーへのメッセージ（励ま

し・アドバイス）が綴られ、履修学生は自分と同じ境遇のリーダーの言葉を食い入るように読み、そこに解決のヒントを見出し、勇気と自信を得ています。そして二つ目の目的であるコミュニケーションスキルの向上のために、聞き書き作家・小田豊二氏を講師に迎え、「聞き書き」の手法をご指導いただ



き、対話や情報の引き出し方について学びます。さらに、初対面の学生が5〜6名のグループになり社会人へインタビューし、冊子にまとめる課題を出しています。「聞き書き」の手法はもちろん、グループ内の交流や、社会人との対話を通じて実践的に学ぶワークです。各グループでテーマを決め、インタビューする人を選定し依頼をし、アポイントをと

り、一言一句を文章にした後はインタビューをした方と校正を繰り返し、完成させていきます。この過程で、授業外で連絡が取れずに悩むグループ、社会人に趣旨を説明しアポイントをとることに苦戦するグループ、特定のメンバーに負担が及び不和が生じているグループ、ビジネスマナーが欠けていて指導されるグループと様々でした。

しかし、このように小さいけれど実のある失敗体験と成功体験を繰り返し、着実に成長をしていると感じます。そして、社会人との対話を通じて、自分が社会で働くイメージを描き目標を定めた上で、大学時代にすべきことは何かを考える絶好の機会にな

つていると思います。

学生の成長を感じる一節を紹介します。今年度、私が学生より聞き書きの対象として依頼を受け、インタビューを受けたのですが、その学生が「冊子」の結びに次のようにつづりました。「前職のお話やキャリアアセンターでのこと、プライベートのことなど貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。働くということ、その先の未来のことについて考えるきっかけとなりました」。

私は、この科目を通じて学生が麗澤大学で学ぶ意味を知り、いかに大学生活を過ごすかという行動のヒントを提供する機会になっていると思います。大学生生活は、学生一人ひとりにとって、キャリアを形成する重要な時期であり、卒業後の生き方を左右するといっても過言ではないでしょう。そんな大切な時期を、できるだけ多くの経験をし、自分の内に秘めた潜在能力を最大限に引き出し、成長していくことを願っています。

仁草木に及ぶ…「慈しみの心は、人間はもとより植物にも及ぶ」の意。廣池千九郎は、著書『道徳科学の論文』9巻に「生物を殺さず、仁草木に及ぶ」（その慈悲は草木にまで及び、みだりにこれを伐採せず、且つ戯《たわむ》れに草木の芽を摘《つ》み取るなど無益のことをなさず、常にこれを愛護する精神を有せねばならぬのであります）と格言を残している。

リーダーセミナー…課外活動のリーダーとなる学生を対象に、年2回実施し、毎回約80名が参加している。グループワークやディスクッションを通じてリーダーの重要性を確認し合うとともに、リーダー同士の相互理解を深め、課外活動の活性化を図っている。

聞き書き…語り手の話を聞き、それをその人の「話し言葉」で書いて、活字にして後世に残すこと。聞き手と語り手が信頼関係を築き、語り手の人生に耳を傾け、歩んできた人生を綴り、世界に一つしかない冊子を仕上げていく。語り手と聞き手が対話を重ねて、語り手の人生や思い出を「話し言葉（聞き書き言葉）で文章化」していく共同作業である。

〈特集②〉 キャリア教育科目

## 女性のキャリア

キャリアアセンター 関根那美



性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発揮することができる社会——男女共同参画社会において、「仕事か家庭か」という二者択一ではなく、「仕事も家庭も」と、両方を叶えたいと望む女性は増えている。女性も社会に多く進出し、働きやすい環境が整ってきたことで、社会でのチャンスが格段に増えた。

キャリア科目「ジェンダーとキャリア形成」では、このような男女共同参画社会の現状を学んだうえで、実際に働く卒業生の多様な働き方から自己の将来像を描き、職業選択につなげることを目標の一つとしている。

私が1歳を迎えたばかりの娘を保育園に預け、麗澤大学のキャリアアセンターで働き始めたきっかけは、登録していた派遣会社からの求人紹介を受けたことであった。派遣社員としての数ヶ月間を経て、後に麗澤大学の嘱託職員として直接雇用されてから、気付くと娘は5歳になっていた。また、同じ麗澤大学の職員の中には、より家庭の時間を多く確保できるパート職員として、2児の育児と仕事を両立している女性もいる。

子供を持ちながら働く女性の多様な働き方の一例として「ジェンダーとキャリア形成」の授業に登場し、女性の働き方を考えるトークセッションを行う

た。総合職、一般職、パートタイム、派遣社員など、多様な働き方の理解を促し、仕事と家庭との両立について、自己の将来像を描けることを目的に、お互いの働き方、仕事への取り組み、子供に対する思い、自分自身と家庭の将来について、共に考える機会となった。

女子学生の反応は様々であったが、半数が、意欲的に社会に出ることは反するものであった。「就職はするが、結婚をしたら専業主婦になりたい」「自分の母親と同じように家を守りたい」「働きなから子育てと家事をやるのでは、自分の時間が取れなそう」「子育てにはお金が必要なので、働かざるを得ないだろう」「自分も結婚・出産後に働くのであれば、無理なく両立できる、一般職かパートに就

きたい」など。仕事を持つこと、働く事に対して、精神的充実感や自己の成長を見出そうとする意見がとても少ないことに、落胆した。

豊かな人生を送るためには、もちろん金銭的余裕を得る事も必要だが、自分自身に価値を求め、目標を持ち、成長することで、充実した人生が送れるのではないだろうか。そう思い、私は出産後に仕事を始めた。男女共同参画社会とはいえ、子供を産むのは女性であることは変えられない。だからこそ、結婚や出産といった人生の転機を迎えた時に、ワークライフバランスを考え、より良い選択ができるようなキャリアを形成することが、女性には特に必要だと考える。

〈特集②〉 キャリア教育科目

## 麗澤大学のキャリア支援をうけて

清水晴菜  
(中国語・中国文化専攻4年)



私は2013年の春から新社会人として社会に出ます。一社会人として、社会に出て働くことに対して不安もありますが、楽しみでもあります。

自分が社会に出て働くなんて少し前までは全く想像ができなかったですし、考えなくても大丈夫、何とかなると思っていました。しかし大学3年生になり、就職活動が始まり、否応なしに自分の将来について考えなくてはいけなくなりました。まわりの友人たちが将来のことを話しているのを聞くだけで、自分にはやりたいことがないのと、とてつもなく不安になっていました。そんな私の不安を解決してくれたのはキャリアセンターの方とのお話でし

た。麗澤大学のキャリアセンターのカウンセラーの方々は、どの方も私の社会にできることに対しての不安やモヤモヤした気持ちにしっかりと耳を傾けてくれ、社会にでる準備のアドバイスをしてくれました。キャリアセンターの方と話をするだけでずいぶんと前向きに物事が考えられるようになりました。漠然とした将来への不安を相談できるプロの方々が近くにいるというのは本当に心強いものです。

また麗澤大学にはキャリアに関する授業が多くあります。この授業にしっかりとでていたことも自分の自信につながったと思います。

特に大学3年生の冬に受けた「キャリア形成演

習」という授業は本当に勉強になりました。この授業はふつうの授業とは異なり、就職活動におけるプロの外部の講師の方が来てくださり、9つのクラスに分かれて、面接対策や履歴書の添削などをみっちり指導してくれるというものです。私はこの講義にて、自分の就職活動に対する気持ちや、自身自身に対する自信のなさからくる不安が解消され、それがやる気と自信に変わりました。そうなるまでに、講義を担当してくださった講師の方からの面接態度や履歴書に対する厳しい指摘に何度もへこみましました。しかしその指摘があつたからこそ自信をもって就職活動に取り組むことができました。また就職活動のことでではなく、自分がこれから社会にどう働くのか、何のために働くのかについて深く考えるいい機会になりました。

前述のようなキャリアセンターのカウンセラーの方々の対応や、キャリアに関する講義を受けてきて、私は考え方や物事のとらえ方が変わったと思います。今まで全く自分に自信がなく、就職活動も私なんかじゃきつとうまくいかないと思うていました。しかし、そうではないということ、自分にもいい所があり、自分に合った会社があるということを知ることができました。最初は就職活動も渋々やるといった感じでしたが、楽しんでやることができ、結果として就職活動も無事に終えることができました。それも本当に他大学とは違う手厚いキャリア支援のおかげだと感じています。

大学のキャリア支援で学んだことを活かして、新社会人として精進していきたいと思えます。

## キャリア支援の目指すモノ

～百人百通りの支援

キャリアセンター課長補佐 川瀬達也



在學生に限らず卒業生（退學者も含めて）にも「いつでもおいで」と声をかけます。この言葉には「父母の心」を持って幸せな将来に向けた支援・指導を行いたい」と心から願ひ、學生や卒業生と家族の様に向き合う「麗澤の精神」が込められているのです。

このような思想によって運営されている麗澤大学キャリアセンターでは、個々人の就職活動の成果（評価）は、内定企業の知名度が高かったり、内定の取得時期が早期であったりという事で計られるものではありません。進路を決めた学生本人が、ご縁を頂いた企業で成長し、社会に貢献できるかどうか

が重要であると考えています。内定は通過点です。

一般的に入社して3年程度は仕事の基礎を作る時期です。部活動に例えるなら、素振りや筋トレ、走り込みといったところですね。まずは自己を磨き、4年、5年が経過した後には、自己の成長を感じ、信頼される仲間やお客様が出来る。このようなやりがいを実現し、中長期的な視点を持つてほしいと思うのです。

よって、マクロで就職活動の成果を考えれば、「内定率」（就職希望者に占める就職決定者の率）の高さではなく、入社後の満足度（定着率）も含めて評価されるものであると捉え、百人百通りの支援・指

導を行っています。

進路選択・就職活動を通じて、学生たちは大きく成長します。本来もっている能力が引き出され、目がキラキラと力強く輝き、表情がイキイキと変化します。この大切な時期に学生たちとどのように向き合うか、私たちは真摯に考えなければなりません。よう。『父母の心』を持って学生と向き合うとは、就職活動などのHOW TOを教えるのではなく、学生が自主性を育み、自分の可能性に気付くよう、成長の手伝いをするといったスタイルが一つの例です。つまり、答えを教えるのではなくヒントや考え方を伝え、時間をかけてでも学生が自信をもてるようにじっくり向き合って支援をしています。私たち自身、日々学生たちと真剣勝負で向き合い、共に勉強し、悩んだり笑ったりしています。百人百通りの支援を目指し、「本当の幸せ」と向き合い私たち自身も成長していきたいのです。

## 1 より多くの学生と繋がるために

～学内SNS「Green Community ひろぎCafe」導入

### 環境の変化に対応した学生支援

既にご承知の通り、今日の就職活動はICTの普及により情報収集がスムーズになり、多くの求人募集企業と出会う事が可能になりました。また幅広く様々な業界の特徴や仕事の内容・スタイル等でも情報を得る事が出来、働くイメージを深めることも可能です。

しかしながら、一方ではこの便利さが就職活動の本質を解らなくさせているのです。インターネットから得られる情報に依存し、人に会って会社を『感じる』という事や足で稼いだ情報を基に、自己の責任において進路を決定すること等の重要さに気が付かず、苦しんでいる学生が増えたように思います。

ICTの発展による多様な就職情報（企業広告も含め）に戸惑い、様々な悩みを持つ学生が増えたのではないのでしょうか。

そこで、これらの課題を改善するために、検討に検討を重ねて絞りだしたひとつの挑戦がありました。文部科学省平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】に採択された「インタラクティブなICTシステムを活用したきめ細かな就職支援」プログラムです。在学生、卒業生、教員、職員との輪を広げ、繋がる機会を創出する学内SNSサイトを構築しました。ICTシステムを活用して、学生一人ひとりの資質や人柄、就職活動状況を把握して記録として蓄積し、適切な情報の提供や面談へ導くなどにより、思い込みや情報不足による誤った就職活動を防ぎ、満足度の高い職業選択を実現しようというものです。

参考までに申請書の取り組み概要を、以下にご紹介します。

本取組は、インタラクティブなICTシステムを構築して、学生一人ひとりのキャリアイメージや実際の就職活動状況等をタイムリーに把握する

とともに、学生の希望に見合う求人情報を届けることで、厳しい経済環境下での就職活動を強力に支援しようとするものである。中でも、長期間に渡る就職活動は、学生のモチベーション低下を招きがちであるが、折々に活動状況を尋ねるメールを配信し、それを下支えしようという点に特徴がある。また、日々大学に届く求人情報に加えて、教職員の企業訪問によって得られた独自の会社情報をメール配信することで企業選択のミスマッチ防止に役立て、将来の離職率を抑えることを目的としている。これは、大学の教育力は、卒業時の就職率で評価されるのではなく、個人に見合った仕事とのマッチングにあるという考えから、卒業生調査の実施によってその効果を判定し、その後の学生支援に繋げていくものである。

〈参考〉<http://www.reitaku-u.ac.jp/career/career-career/20120330.html>

このインタラクティブなICTを実現するため

に「SNS」である「Green Community ひろふCafe」(通称:グリコミ)と就職支援に特化した「就勝NAVI」の2つのシステムを活用しています。ここでこだわったのは気楽にアクセスできる雰囲気を目指したSNSを導入した事です。システムは使われてナンボ。学生が「楽しい」「使いたい」「役に立つ」というような魅力ある仕組みでなければ意味がありません。以前から求人検索・企業情報検索できるシステムはありましたが、頻繁に活用されてはいませんでした。学生が一般に利用するリクナビやマイナビ等の就職支援サイトとの差別化を図り、麗澤大学だからこそ得られる情報の価値を知ってもらうためには仕掛けが必要でした。

私たちは、様々な方法を駆使して学生と企業のご縁を繋ぐ「麗澤ならではのICT」を目指しています。

ここで一例をご紹介します。支援記録のデータ件数は年間6000件強にもなります。これはキャリアアカウンセリングの記録はもちろん、SNSからの

メッセージや立ち話で得られた特記事項などにも及びます。様々な情報を集め、行動特性や人柄の把握に努めています。

一方で卒業生の活躍する企業や、人を財産と考え、て厳しく育てる企業、グローバルな環境で競争している企業などをターゲットに、年間約800件の企業訪問を実施しています。また、卒業生ともコンタクトを取り、実際にそれらの企業の特性を得るために情報収集を行っています。この学生情報と企業情報を結ぶ仕組みとして、SNSは役割を果たし、学生と企業をつなぐ機会を創出する就職支援システムに成長しました(システムの概要については、次ページを参照して下さい)。

さらにグリコミの役割は就職支援に止まらず、学生同士の交流や教職員と学生間のコミュニケーションを円滑にしています。PR広告や情報共有、意見交換を図ることのできる仕組みを活用してSNSとしての魅力を向上させ、学生の利用率を高めることに成功しました。そして、利用率が高まることによ

って学生間や学生と教職員、更には学生と卒業生が多面的に関わりを持つことが可能となり、一人ひとりの学生生活(課外活動など)から、教育・就職活動のサポートまでを可能にしたのです。これらの繋がり(交流)をきっかけにして、本学の目指す学力(①物事を公平にみる力、②繋がる力、③実行する力)を確保し、教育力を向上させるポテンシャルもあります。よって、ユーザーは全学生、全教職員が対象となっています。さらには、卒業後も使い続けられるようになっていのです(平成21年度卒業生以降)。

平成21年度以前に卒業された方でご興味のある方はご連絡ください。ID発行いたします。詳細は「<https://www.sps.reitaku-u.ac.jp/>」のお知らせ「麗澤大学 卒業生の皆さまへ」をご覧ください。

## システムの概要

ここでは、簡単にグリコミの多様な機能をご紹介します。具体的機能としては「ブログ」、特定のグループ内での円滑な情報発信や意見交換を図る

「コミュニティ」、SNS参加者に広く質問し回答を募る「Q&A」、オンライン百科事典であるWikipediaの麗澤大学版である「れいたくwiki」、SNS参加者と連絡が取れる「メッセージ」、その他にも大学や学生団体等がSNS参加者にお知らせをする「掲示板」などが設けられています。画面イメージはfacebookやmixなどの一般的なSNSと同様に一人ひとりにマイページが設けられ、各種機能に関する新着情報が表示されるほか、それぞれの機能のページに飛べるリンクがあり、そのリンクの一つに就職支援に特化した「就勝NAVI」が設けられています。

「就勝NAVI」の具体的機能としては、まず「求人情報検索」機能があります。麗澤大学に寄せられる求人がデータベース化され、検索・閲覧することが出来ます。この求人情報には、本学卒業生の入社実績や過去の就職活動の体験をまとめた「就職活動体験記」、教職員が企業を訪問し採用情報や所見をまとめた「企業訪問記録」のリンクも貼られて

います。「就職活動体験記」や「企業訪問記録」はそれぞれ企業名からでも検索できるように なっています。

また、キャリアセンターの支援を受けられるように希望業界・職種など情報を登録する「進路希望登録」を行ったリ、「就職支援行事」や「個別相談」の予約等もこのシステムで行えるようになってい

ます。この学内SNSを平成21年12月に運用を開始し、キャリアセンターを中心に教職員と学生を含む約30名がファシリテーションに参加しました。従来のキャリアセンターはともすれば学生にとってはやや敷居の高い存在でありましたが、SNSの機能を使う事によって学生との距離感が縮まり、リアルなコミュニケーションが活性化、キャリアセンターに対する親近感が生まれました。日頃個別に窓口で交わされるような質問が、Q&A機能で行われるようになり、質問者以外の学生の問題解決にも役立ち、就職活動に関する悩みや活動状況なども自発的にプロ

グ

成果があるのです。システム内で学生間や学生と教職員などの関わり場となる「コミュニティ」が平成24年12月末で470件運用されています。同じ興味や志を持つ学生や教職員が、ICTシステムを介して交流を深め、趣味や課外活動のグループを設立しています。また、既存の学生団体においても交流が一層活発になり、公認団体の約90%がコミュニティを立ち上げて活動状況をSNS内で発信する等、メンバー間の交流を深めています。当初は就職の課題解決を狙いとして導入したシステムですが、それ以上に人と人を繋ぐきっかけを容易に創造し、課外活動への興味、さらに活動参加に繋がる等、SNSによるコミュニケーションによって成長の機会(部活動やボランティア活動等の正課外教育を含む)をもたらしてくれました。

さて、進路・就職支援においてはどのような効果が表れたのでしょうか。

SNSのメッセージ機能を使って、学生との連絡

機能で書き込みがあることから、サポートの必要な学生を早期に見つけるようにもなりました。そして、その様な学生に対しては直接メッセージを送る等を行い、来室を促す事が出来るようになったので

す。本学の学生支援のモットーである「Face to Face」を補うきめ細やかなツールとして活用を継続し、現在では学生支援グループを所管部署として、課外活動・授業・留学・進路などの学生支援窓口を持つ多くの部署で主体的に創意工夫を行っています。平成26年度からは、更にユーザビリティを向上した新バージョンが始動いたします。

## 2 SNS導入の効果

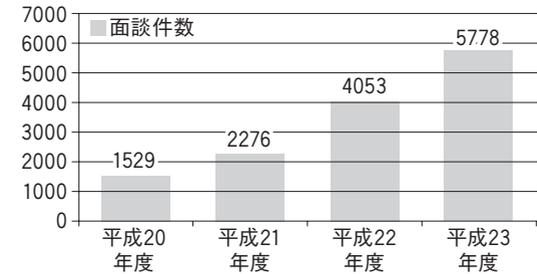
バーチャルからリアルな繋がりがへ

本プログラムの成果は、学生との繋がりが(接点)を著しく増加させたことで表されます。これはICTシステム内に限らず、直接学生に直面する「Face to Face」の接点が著しく増えたことに大きな

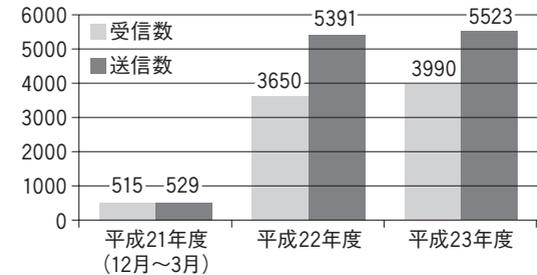
やアドバイス等により、学生との信頼関係に効果が表れました。平成23年度のキャリアセンタースタッフによるメッセージ送信数の合計は5523件、受信数の合計は3990件にもなります。限られた時間帯では対応しきれない相談や就職活動の報告や相談等が、ICTシステムを介して著しく増えたことを表しています。また、ICTを活用して気軽に連絡が取れることにより、直接学生に直面するキャリアカウンセリングの利用状況にも大きな成果が表れました。「Face to Face」の接点です。ICTを導入した平成21年度の面談等の記録件数は2276件であったのに対し、平成23年度は5778件と2倍以上の利用となりました。

さらに面談機会の創出は、本学スタッフが企業訪問して収集した優良企業の情報を効果的に学生へ伝えることを可能とし、内定をゴールと考えない、本質的な就職支援を実現する環境が少しずつ整ってき

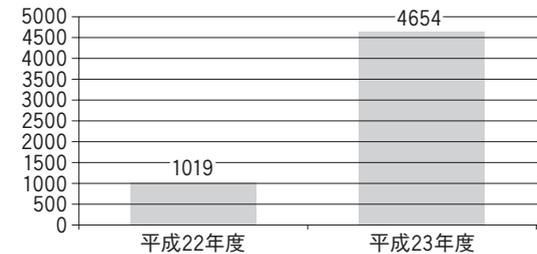
①キャリアカウンセリング（学生面談等）の推移



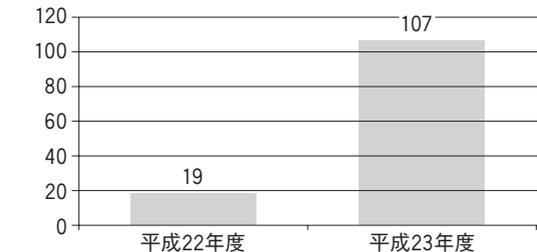
②キャリアセンタースタッフによるメッセージ送受信件数



③ICTシステムにて紹介した企業への求人情報閲覧件数



④ICTシステムにて紹介した企業への内定実績数（人数）



みんなで支え、育てる

学生は、就職活動を通じて多様な価値観や考え方に触れ、これまでの自分を振り返り、大きく成長します。例えば、活動の過程で学生は自己を表現する機会が多々ありますが、相手に上手く伝わらない、思うように結果が出ずに何を目指しているのかが分からなくなる等の悔しさや空しさに沢山悩み、自分と向き合います。その様な時にこのSNSはとて心強い味方になるのです。

職業に対する質問や、就職活動の悩みなど、様々な情報がSNSの中でやり取りされます。中には、就職活動が上手く行かず、辛い気持ちを吐き捨てるようなブログもありますが、これらに対して卒業生から応援メッセージや教職員からも励ましの書き込みがあります。キャリアセンターではそれらの内容を見ながら、カウンセリングに導いて、適切な支援に繋ぐよう注意を払っています。

SNSの活用により、多くの学生の情報をキャッチし、ICTシステムを使ってサポートをすること

が可能となりましたが、本当に大切なのは従来からモットーとしている「Face to face」です。SNSはひとつのツールとして上手に付き合いながら、しっかりと学生本人と向き合っており、大切な人生の転機を支援するのが基本です。

人を支援することや育てることは簡単なことではありません。「甘やかし」と「優しさ」の区別や定義についてもキャリアセンター内で良く話し合われるのですが、「本当に学生にとって必要な支援・関わり方は何か」を考え続けなければなりません。同様に、ICTの利便性は「消費者サービスの向上」であっても「教育的効果の向上」でない場合が多々あります。表情が伝わらないメッセージには誤解を生む危険性もあります。ICTの限界を理解し、SNSの利点を効果的に活用しています。学生と向き合い心の通った温かさの伝わる麗澤らしい支援を大切にしています。それが麗澤教育です。

## 企業情報の提供

キャリアセンター 小田中悦子



麗澤大学では毎年、全国6000社超の企業に求人票を発送しています。

キャリアセンターではスタッフが独自開拓も行いながら企業を訪問し、よりよい企業を見つけるために常に打合せを重ね発送企業を検討しています。同時に新聞や雑誌、四季報などいろいろな情報に目を通し東京商工リサーチ（TSR）で企業情報や財務状況を調べて求人票を発送しています。また企業から本学に送られてくる求人票には紙ベースのものから直接企業がネット上の「求人ナビ」や「ユニキャリア」に登録するもの等あります。「求人ナビ」を活用することにより、求人数は飛躍的に増え日本全

国5000社以上の企業が登録をしています。学生は「求人ナビ」の情報や本学独自のSNSグリコミの「情報の宝庫」というコミュニティを通してこれはと思う企業の求人情報を直接知ることができます。「情報の宝庫」はリクナビ・マイナビ等とは違って数は少ないのですが、本当に麗澤生に入ってもらいたい企業を選んで求人載せているので就職活動中の学生は必見です。

さて麗澤生に入ってもらいたいという企業とは一体どんな企業でしょうか。

TVやネットからは有名タレントやアイドルが「○○ちゃん」と叫んだり、歌ったりして商品名

や企業名等が流れています。就活時、学生達の企業選択の基準をみていると、このコマースシャルなどの表面上の知名度だけに惑わされている傾向が見られます。この様な有名・人気企業にこだわって就活を続けていると、終盤まで非常に苦しんでいるように思います。

本学では、学生が社会人になってからも成長できる企業への就職にこだわっています。

真殿センター長は常に「これから世界的に飛躍する企業は、人を育てる企業です。個々人の潜在能力を見出し、成長できる機会を必ず与えます。学生にとっても、自分が成長できる職場で働くことは幸せなことでしょう」と説いています。

厚生労働省も、従業員の主体的なキャリア形成を積極的に支援している10社を、「キャリア支援企業表彰」人を育て・人が育つ企業表彰」として発表しています。

経済産業省は「雇用創出企業」として人を育て、人材を資本に活躍する優良企業を各県レベルで発表

しています。

それで今回は、優良企業とそれと相反するブラックス企業について私が考える要点を述べてみたいと思います。

### 【優良企業とは】

\*学生の知名度は高くなくても特定の業界で名の知れた隠れた企業。そして、他社が参入しないニッチな分野で高いシェアを持つ企業、いわゆる競争相手のないオンリーワン企業。

\*株式上場の有無、規模に関わらず安定した業績・シェアを誇り経営状態の健全な企業。自己資本比率の高い会社も見逃せません。

\*経営者の企業理念の有無も大事でその企業理念を社員が理解し、実行している説明会などで学生に伝えられるかも大切な要素だと思います。

しかし、どんな優良企業であっても数十年後もそのまま優良企業である確率は、昨今の経済情勢からあまり高くないと思われます。

「自分が働く場所としてふさわしいか、自分にあつ

ているか」といった視点は大事です。

### 【ブラック企業とは】

カルト教団、暴力団の支配下にある企業ばかりではなく、一般の会社で有名企業の中にも存在します。数年前、内定切りという言葉があちこちで聞かれ、麗澤大学でも数名の学生がその内定切りに直面しました。そのような企業はブラック企業として大学職業指導研究会の加盟大学間で情報を共有しています。

実は、ブラック企業といわれる情報は優良企業の情報より世の中にあふれているのです。ネットで検索すると多くの情報が載っています。

たとえば、

\*とりあえず働かせてみて、会社が「使えない」と判断したら「試用期間満了」を口実に解雇する。

\*タイムカードを改ざんするなどして残業代を支払わない。

\*新卒を使い捨てにする。過労死寸前まで働か

せ、研修などで理不尽な課題を出しどんな命令でも「おかしい」と思わないようにする。

\*退職時、失業手当の受給に必要な離職手続きをしなかったり、最終月の給料の支払いを拒否したりする。

\*戦格的なパワーハラスメントとして本人が会社に行きたくないと思うまで嫌がらせをする。「解雇」にはしたくないので、辞表を書くまで辞めさせない。

等々たくさん載っています。

卒業生からの話をもっと生々しいです。手水虫になったエステイション、ノルマのために貴金属や着物を自分や家族が購入したが足りずに退職した人、また研修中にもかかわらず営業活動を強いられ契約が取れるまで帰ってくるなど強い口調でまくし立てられる。日本語教師になるためには数十万円かけて教育システムを勉強しなくてはならない。

先輩たちは、麗澤の後輩にはこんな企業に入社させたくないと思死に話してくれます。

こういうブラック企業を就職活動の時に判断するのは難しいのですが、一例としては離職率の高い会社かどうか、従業員数に対して内定者数の割合が多い企業などは注意が必要です。こういう会社をキャリアセンターでは「粗製乱造の会社」と呼んでいます。

2012年秋に、厚生労働省から大卒3年目「業種別離職率」が初めて発表されました。

それによりみると、全産業の平均離職率は28・8%となっていますが、サービス系企業では50%近くの人が入社3年以内に離職し、反対に製造業では低いパーセントとなっています(データ：<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/24.html>)。

このデータが出る以前から本学では製造業や卸売業を中心に学生に企業を紹介していました。今回のデータから麗澤大学のキャリアセンターのおすすすめ企業の基準は間違っていないかと自負しています。

1990年代終身雇用制度の崩壊により「就職した会社は終の棲家」というように定年まで勤めあげることが美徳とされた時代はおわり、常に自分を成

長させて次のステップに進む時代に学生たちは直面しています。

だからこそ企業選びは大切であり、自分にとって良い会社を見つけることが大事なのです。そして卒業したみなさんがキャリアセンターに元気な顔を見せてくれた時、その時が私の一番幸せな瞬間です。



## 就職支援における好循環のスパイラル

キャリアセンター キャリアカウンセラー 長谷川善仁



「学生が教授の研究室に遊びに行き、お菓子やコーヒーをご馳走になっている」。

都内のマンモス大学を卒業した私にとっては、信じられない光景でした。2003年4月、この大学に入職して間もない頃、「これが麗澤の校風か！」と強く実感したことを思い出します。

麗澤大学の学生数は、平成23年度で約2700人。一般の人々にもっとも馴染みのある私学の二校、早稲田大学約4万4600人、慶応義塾大学約2万8900人と比較すると、明らかに少人数であることがわかります。この少人数教育のメリットは、「顔と名前が一致する」「キャンパスのどこで会

っても学生さんを名前で呼べる」ことだと日々実感しています。仮に先に例示した2校で就職支援を担当していたとしても、週に何度も相談にやって来るヘビューザーの学生か、人気俳優などの余程の有名な人か、何か特別なやりとりや事情がない限り、学生の顔と名前をセットで覚えることなどできないでしょう。ましてや、あらゆる学生の名前を覚える気になど到底ありません。

就職支援の場面では、学生自身の生い立ちや決して笑って語れない経験にも踏み込みながらカウンセリングを行うことがしばしばあります。約20年間の人生で育まれ、発揮された資質を、過去の経験から

発掘し、学生自身が自己の能力への自覚を深めるためです。

このような心の内面や過去の経験にまで深く踏み込んだやり取りを、何度となく重ねていくなかで、学生と我々教職員の間には深い信頼感が生まれていきます。そして、あたかも駅伝選手とその横で声を掛けながら伴走し続けるコーチのような関係で就職活動の本番へ臨んでいきます。

こうした関係を築きつつ、個々の学生の個性を把握しながら就職支援を行なっていくわけですが、学生の個性を把握することは、その時々にも目の前に居る学生本人の就職支援に生かされることには留まりません。

教職員が個性を理解した学生が、就職活動を極めて、社会へ巣立って行きます。多くの学生は民間企業へ入社していくわけですが、私たち教職員は、入社後も在学中に支援した学生が入社した企業に足を運びます。ご想像通り、採用して下さったことへの御礼を申し上げながら、翌年以降も引き続き本学の

学生を採用していただけるようお願いをするわけですが、新卒採用の担当者や会話をする中で、卒業生の入社後の配属やその後のパフォーマンスに対する評価を聞き、学生と企業のマッチングの結果を検証します。その企業にはどのような個性を持った学生が適しているのか、教職員の頭の中にある「マッチングの回路」に微修正を加えていくのです。卒業生が脈々とお世話になっている企業については、何年も継続して足を運びます。先に述べた微修正が、何年も何十年も繰り返され、就職支援を担当する教職員が持つマッチング回路の精度が、より一層高まっています。

更に、在学中に育まれた学生と教職員の信頼関係は、卒業後の交流へと発展していきます。キャリアセンターには、卒業生が一人も近況報告に来ない日が無いほど、卒業生の来室が後を断ちません。別な目的のためにキャリアセンターを視察に来た他大学の関係者が、その様子を見て驚嘆の声を発する程です。

来室した卒業生は、自身が就職した会社の現状や自身の仕事の状況、仕事を通じて感じるグローバル社会の変化、麗澤大学卒業生の社内での評判や活躍ぶり、時には退社に至った経緯などを伝えてくれます。就業上の悩みを聞くこともありますし、転職の相談や、転職活動のノウハウ提供、卒業生が多数活躍している関係の深い企業への仲介に発展することも決して珍しくありません。

このような連続と続く卒業生とのコミュニケーションから、教職員が新卒採用の担当者と情報交換をするだけでは得られない生々しい実態を知ることができ、麗澤大学卒業生がキャリアを積みむ場としての「企業の評価」を加減することになります。

こうした、長年に亘るコミュニケーションの循環から得られる情報が、麗澤らしい就職支援の重要な基盤ともなっています。

一方、学生にとつての就職活動は、自立の過程でもあり、社会で活躍する自信をつけていく過程でも

あります。社会人生活は、日々刻々と変化する予測の困難な社会において、公私ともに、選択を求められることの連続だと思えます。そうした視点から見ると、就職活動はその第一歩であり、万全な状態で本番のレースにそなえるための助走とも言えるのではないのでしょうか。

大学を卒業し社会へ飛び立てば、孤独なレースが始まります。天候の変化や足場の状況、周囲の選手の様子を見ながら、自ら瞬時に臨機応変に決断を下し、レースを走り抜かねばなりません。そのためには、「自ら考え、自ら行動して答えを見出し、一つひとつを自分の意思で決断する」、就職活動はそのトレーニングの絶好の場であると考えます。

このような考え方から、就職支援の場面では、学生からの質問に対して、教職員の側からすぐに答えを示すことはできる限り避けるようにしています。

学生とのカウンセリングの場面では、まずは学生のおかれた状況や悩みをできる限り正しく理解することから始まります。目の前にいる学生と同じ気持ち

を共有できるように努力します。共有した気持ちや学生にフィードバックすると、学生からは何らかの反応があります。例えば、しっかり共感できている場合には、安堵に満ちた表情に変わっていききますが、逆に、理解がずれている場合には、心配そうな表情や苛々した表情等が現れてきます。そのようなリアクションを参考にしながら、理解に微修正を加え、さほどズレがないと感じられるようになったところで、学生自身が抱えているほんやりとした悩みや課題を、少しでも明確に自覚できるようにサポートしたり、更に内省するためのヒントを提供するなどします。こうして、自身の課題とその解決策や対処法を見出したら、その実行計画をその場で立て、

取り組みの期限を決めます。取り組んだ成果を期限内に我々に報告するように促します。このようなことを繰り返しながら、ゴールまで伴走を続けていくのです（相手は人間ですから、このように一様にはいかないのですが……）。

数十年に亘る企業訪問の積み重ね、少数数だからこそできる徹底した個別面談、愛校心あふれる卒業生との交流、これらが好循環のスパイラルを生む就職支援の風土が、百人百通りの、麗澤ならではの就職支援を強力に支えています。



## キャリアセンターに勤務して

キャリアセンター主管 中嶋 信隆



2010年6月より私はキャリアセンターでお世話になり、学生の就職支援を担当することとなりました。

前職は全く逆の立場にあり、いかに自社に適合し貢献してくれる人材の発掘にあった訳ですから、多少嫌われる質問も繰り返していました。しかし、人を見るということは難しいものです。ある程度のこととはわかるでしょうが、それ以上は大まかな判断ならざるを得ません。

その時代、私が心がけていたことは、それぞれの学生にはそれぞれ良いところがあるのでそれを引き出してあげて語らせてみたいということでした。緊

張のあまり折角苦労して考えてきたことが半分も言えない人、集団面接ではどうしても隣の他大学の学生の言うことに対し自分もと思い張り切り過ぎる人、最後に大きな声でパフォーマンスを訴える人、

終了後に人事担当に自分の面接時間が少なかったと気にする人、様々ですが面接官はきちんと皆さん一人ひとりを見ています。ですから、すらすら言えることだけが面接ではありません。多少たどたどしくとも良いですから熱意を持って自分の言葉を述べて下さい。そうすることであなたの真摯な訴えが相手に必ず伝わるものです。そしてきちんとした評価をしてくれるはずです。

私は今、企業を訪問し、人事部門の方々と毎週面談をしております。必ずと言っていいほどに人物重視であることを唱えられます。かつての〇〇大学より〇〇人を採用するという時代は終わりました。今や企業は採用予定人員に満たなくとも、人材が得られなければ採用は終了します。そして私達が訪問した時に、「良い人材がいれば会いますよ。既卒者でも」と言います。

同業他社よりも少しでも良い人材を求めているのです。どうか最後まであきらめずに挑戦して下さい。そしてキャリアセンターにも相談に来て下さい。

一例を上げますが、今年度の就職活動を行って、

見事優良企業に内定を得た学生はあきらめませんでした。私にもくらいついてきて、常に私が行きなさいと言う通りに行動してくれました。夏の暑い日もスーツをきちんときて一生懸命歩いていました。そんな姿を見て私もなんとか内定を取らせてあげたいと、ただそんな気持ちで一杯でした。最後は紹介した企業を自分が選択できるまでに成長したので。そして私は面談後に残す記録に「そろそろ内定が近い」と思わず書いています。2012年も私は学生達から素晴らしい感動を与えていただきました。今後も私が元気な限り、学生達と素晴らしい感動を分かち合え続けたいと思っています。

## 「誰かのために」お世話をする

〜後輩へのサポート

キャリアセンター主任 齋藤音羽



「就職活動における自分の経験を後輩のために活かしたい」「お世話になったキャリアセンターのために自分達に何かできないだろうか」。そんな学生の思いから、就職アドバイザー制度が始まった。2005年のことである。当時4年生だった彼らは、3年生向けにまず、アンケートを実施した。これから就職活動に臨む彼らのニーズを掴み活動するためだ。その結果に基づき、より効果的な活動のため、「イベント班」「相談班」「サポート班」に分かれ、活動をする事となった。

初年度に行った活動は、グループディスカッション、業界探訪ツアー、就職活動マニュアルの作成、

要かの打ち合わせを何度も行い、自分達の「やりたいうこと」をどんどんと実現していった。そして、サポートを受けた学生からは、「来年は、今度は自分たちがあのようした後輩支援をしたい」という嬉しい声が聞かれるようになり、今日まで脈々とこの就職アドバイザー制度は、後輩へとバトンタッチされ続けていくことが出来た。

就職アドバイザー制度発足から7年目を数えた本年度より、自主的に活動範囲を広げ、課外活動団体として「キャリアサークル」という位置づけに変更し、活動を継続することとなった。それというのは、サークル化することにより、より低学年時から活動ができるようになるほか、学生主体での活動が益々し易くなるというメリットが考えられるからである。本年度はまだ4年生による活動が主であったが、今後は低学年からの提案により、就職活動の枠を超え、自由に「キャリア」について取り組む活動の割合が増えることも期待している。

キャリアセンターでは、当該サークル活動をする

キャリアセンター員やアドバイザーの顔写真入り自己紹介書の作成などである。学生によるこのような活動は、後輩の3年生達の心に響いた。何から手をつけ、どんなふうに関与を選び、いかに企業を選んだのか。どうしたら自分の良さを伝えられるのか。服装やマナーはどうすれば良いのか。キャリアセンターの職員が行うセミナーやイベント等では伝えきれない生（ナマ）の情報が、厳しい就職活動を突破した先輩から後輩へと直に伝わった。そのような体験が聞けただけでも大変貴重なものであるはずだが、さらに、それをどんな形で伝えれば最も効果的であるのか。そのためにはどのようなイベントが必

学生たちの「自発性」を尊重し、それを実現するための支援はもちろん、後輩支援をする4年生自身の成長にも力を入れている。就職アドバイザー時代から培われた経験は、必ずや学生の「財産」となる。そのためにも、何かイベントをやる際にはまず企画書の作成から始まり、イベントの目的・目標を明確にし、3年生への告知から当日の運営まですべて彼らが行うように仕向けている。そしてイベントが終わればその効果を確認し、反省点を活かし、次回へとつなげていくために報告書の提出を義務付けている。さらに年度の終わりにサークル報告会の場で1年の活動を振り返り、後輩へとバトンを渡していく仕組みとなっている。

本学における就職アドバイザー制度は、「誰かの役にたきたい」という学生の思いを原動力とするところに特色がある。就職アドバイザーに加えて、学生寮の寮長、大学の魅力を学内外に広くアピールする自校サークル、オープンキャンパスの学生スタッフ等は、その現れの一端であろう。そのような活動

に励む学生の姿には、並んでいる澤がお互いに潤しあうように、志を同じくする友と切磋琢磨すると同時に、周囲の人々にも影響を及ぼしていく（麗澤の意味）、いわば本学が育てようとする学生像を重ねて見ることができる。本学の名に相応しい学生の活動を目にするたび、私は頼もしくもありまた、誇りに思う。そして、私自身もこの志を持ちながら微力ながら本学の学生が卒業後の進路の目標を実現しようとする時期に、行く先を照らす道標として、微力ながらも支援に努めたいと考えている。



キャリアサークルによる相談会

〈特集④〉 成長の機会

## 柏レイソルインターンシップに参加して

山本千晴

（国際交流・国際協力専攻3年）



私は2年生の夏休みが始まるころ、「日立柏レイソル」でのインターンシップに5期生として参加しました。元々サッカー観戦が趣味だったことと、その当時何か新しいことを始めたいと思っていたので参加を決意しました。

インターンシップ生は試合日に報道関係者の受け付け対応や選手からのコメント取り、メンバー表や公式記録の配布など、様々な業務を担当してホームゲームの運営をサポートし、またそれ以外の平日でも個々で事務所に通って広報関係の事務作業をします。平日業務では自分が書いた記事を柏レイソルオフィシャルブログ「日立台広報日記」に載せて頂い

たこともありました。このような通常体験できないような業務を繰り返し経験していくことでレイソルを支えるスタッフとしての自覚が徐々に芽生え、2011年に柏レイソルがJ1優勝した際にはサポートとはまた違う喜びを味わうことが出来ました。

一方、苦勞した面もありました。翌年度は今までの先輩の数が減少し、新しく大勢の6期生が加わりました。当時リーダーを務めていた私はインターンシップ生を上手くまとめられず、先輩に助けもらってばかりでした。しかし、それではいけないと思ひ、以前より自ら積極的に考え行動するようになりました。試合業務などで皆に指示を出したり、後



試合業務で受付をするインターンシップ生

輩にノウハウを詳しく教えたりしていくことでメンバーはだんだんまとまってきました。そして今では6期生が中心になってインターンシップ全体を引っ張ってくれるようになり、とても嬉しく思います。

また、私は今年度「日立柏レイソル」内で新たにグッズ商品の開発とその販売を行う、マーケティングインターンシップに参加しました。自分達学生にしか出来ない斬新な商品を生み出そうという目標を定め、某企業とコラボレーションしたフットウェアを開発することになりました。この目標が壁となり価格設定やサイズ展開など様々な問題が発生しましたが、私たちは決して諦めずその商品が売れる根拠をチームで協力して徹底的に調べ検討し、リスクを克服することが出来ました。販売開始わずか6分後に販売個数の60足全て完売したという結果は私たちの努力そのものだと確信しています。

私はこの柏レイソルインターンシップを通してたくさんのことを学び、困難を乗り越え成長することが出来ました。これから就職活動が本格的に始まりますがここで培ったチームワークや積極性、主体性を活かし情熱をもって仕事に取り組める企業に出会えるよう日々邁進していきたいと思えます。

〈特集④〉 成長の機会

# 「聞き書き」で大空に羽ばたく君へ

キャリア教育科目特別講師・聞き書き作家 小田豊一



君のことだ、大脇君。

あれからもう3年になるかなあ。僕が麗澤大学キャリアセンター長の真殿達先生の紹介で、はじめて君たち学生の前で「聞き書き」について講義をしたのは。

僕は、緊張して、うまくしゃべれなかった。でも、一生懸命、「聞き書き」とは何か、話したつもりだ。

「聞き書き」とは自分が会いたいと思う人の話を聞いて、それをその人の話し言葉で書いて、1冊の本にして語り手に渡すこと。

「いいかい、これは、とても勉強になるぞ。今の学

生はコミュニケーション力が不足しているといわれているじゃないか。君たちは、会いたい人にまず連絡をとり、語り手になってもらえないかお願いし、OKをもらったら積極的に質問をし、話を聞いて学び、さらに、それを文章にして自家製の本にするんだもの。絶対に就職活動に役に立つだけではなく、学生時代に君たちの人生の師と出会う可能性だってあるぜ……」。

僕は、たしか、そう話したはずだ。

でも、みんなに僕の熱意は通じなかった。寝てる子もたくさんいた。

大学にとっては大切な教壇に、僕を立たせてくれ

た真殿先生をはじめとするキャリアセンターの方々に力足らずで、心から申し訳ないと思った。

（僕が日ごろ行っている「聞き書き」が就職活動のみならず、学生たちの人格形成にきつと役に立つなどと思っただのは、実に傲慢だった。失敗した。僕はなんてヤツだ。キャリアセンターの大事な時間を無駄に使ってしまった……）。

最初の勢いはどこへやら、時間がきたので、僕は自分自身を反省し、縮んだ風船のように、教壇を下りた時だった。

「先生、お時間、ありませんか」。

君は、そう言っ、僕の前に現れた。僕は黙って、うなずいた。

「僕は、3年の大脇崇豪と言います。先生のお話、感動しました。仲間を集めて、聞き書きのサークルを作りたいと思います。ご協力いただけますか」。

やがて、君が中心になって、キャリアセンターの力添えもあり、聞き書きサークルが誕生した。君はどう勧誘したのだろう。授業には来ていなかった学

生たちが、次々と集まってきた。僕の心は、再び、膨らんでいった。

ある日、君は僕にこう言った。

「先生、僕は将来、国際線のパイロットになりたいんです。ですから、どなたかパイロットの方の聞き書きをさせていただきたいんですが……」。

（これだ、こういう積極的な気持ちがいま、大事なんだ……）。

僕は知人を通して、日本航空の国際線のベテランパイロットと君を合わせた。

君は、きちんと挨拶をし、なぜお話をうかがいたいか、その理由も述べた。事情がわかっていた機長は、たくさん資料を用意してくれ、パイロットになるにはどうしたらいいか、仕事の内容、パイロットとして一番大切な心構えまで、君に教えてくれたよぬ。

何時間、かかっただろう。4時間か5時間か。

それから、君はきちんと礼状を書き、そのテープを起こし、わからないところはまたお聞きし、見事

に1冊の本を作り、機長にお届けした。

一番、僕がうれしかったのは、4年になった君がパイロットになるための登竜門、航空大学の面接で、「学生時代に、君は何をやった？」という質問に、「聞き書きです」と答え、その本を提出した時の話だ。

面接官は飛び上がった驚いたそうじゃないか。

君が聞き書きをしたその機長は、「パイロットの神様」と言われた歴代ナンバーワンのテストパイロットで、その機長の判断で日本航空がその機種をアメリカから購入するかどうか決めたという。しかも、技術だけでなく、大変な人格者で、多くのパイロットや客室乗務員から尊敬されている人だった……。

面接官は、あわててこう言ったそうだね。

「君は、この方の聞き書きをしたのか。で、なんておっしゃってた？ 読ませてもらいたいけど、時間がないからさ、少しでもいいから教えてよ」。

君の話聞いて、僕もうれしかった。

そうなんだ、君の熱意が機長の心を動かしたに決まっている。そして、機長は、きつと最後まで君のことを覚えている。熱心に聞いてくる学生には、人の達人たちは、誰だって一生懸命教えてくれるさ。だから、「聞き書き」は素晴らしいんだ。

また、君とその仲間たちは、あの2011年の大震災の後の最初の夏休み、5人の被災者のみなさんをキャンパスにお呼びし、いっしょに寝泊まりしながら、「これから、自分たち学生は何をしたらいいか」、お話をうかがい、泣いた。

被災者の皆さんは、言ったよぬ。

「忘れないことですよ。東北にあの悲惨な大震災があったことをあなたの子供に、孫に、伝えることですよ」。

聞き書きサークルのみんなはがんばって、1冊の本を出版した。それが、『私は、あなたを忘れない』（麗澤大学出版会）だよ。いい本だよ。

大脇君、「聞き書き」っていいだろう。ここに何かいま、君たちに必要な宝物があるよぬ、きつと。

---

それを掘り出すのも、「聞き書き」だ。

だから、僕は真殿先生やキャリアセンターのたぐさんの人たちが応援してくれるかぎり、麗澤大学の学生たちに「聞き書き」の技術とその素晴らしさを伝えていこうと思う。

いつかまた、君のように、「先生、お話がありません」と言って、僕のしほみかけた風船に空気を入れてくれる学生がひとりでも現れることを願って。

大脇君、帯広の航空高等学校の学生寮からの手紙をありがとう。

「先生、一人前になったら、自分の飛行機に乗ってください」。

おう、乗らせてもらいますよ。

君が「聞き書き」を通してパイロットの神様から夢をいただいたように、僕も、君から勇気をもらったのだから……。

# キャリア支援を通じて思うこと

キャリアセンター課長 米田 隆彦



昨年の4月に教務課から就職支援を行うキャリアセンターに異動となり、私にとっては、新境地での業務に期待と不安が入り混じった状態でのスタートとなった。同じ大学の学務部内とはいえ、扱う業務が違いため、初心に立ち返り新しい仕事を通じて、私自身の成長の機会をいただいている。

最初の業務として4月から7月にかけて、これまでの実績から本学との関係が深い企業に、各企業担当者とともに新任の挨拶まわりを行った。4か月で約80社を回り、人事担当者から様々な声を聞く機会をいただいた。

人事担当者との面談通じて各企業の特徴や経営方

針、求める人物像や採用状況、社会情勢など、多岐にわたり企業訪問が生の情報を得る重要な活動であることを改めて実感した。さらに感じたことは、本学の多くの卒業生が各企業で力を発揮し、必要な人材として大いに活躍しているということ。そして、卒業生を通じて本学の教育に対する期待も大きいということである。大学の関係者として、本当に心強く感じるところである。

一方で、肌で感じる厳しい現実としては、これまで関係の深かった企業の採用試験において、筆記試験のハードルを越えられず面接まで届かないということ。本学をターゲットに積極的に採用を考えてい

る企業においても、面接までたどり着かず落ちてしまうということである。筆記試験をクリアしても面接の段階で落ちてしまうケースもある。

就職状況は、リーマンショック後、特にこの3年は全国的に見ても厳しい状況にあり、大卒の新卒求人倍率も2012年3月卒で1・23倍と最近10年では一番低い状況である。2013年3月卒で1・27倍と少し回復傾向にあるが、厳しい状況に変わりはない。厳しいといえども、新卒採用枠では選ばなければ求人数は、数字の上では1以上あるのも事実である。

企業側は、採用の基準を厳格に設定して、そのレベルに達しない場合は、採用計画人数に達しなくても採用活動を終える。いわゆる厳選採用を行い、優秀な学生がいなければ採用しないという状況にある。

この状況の中で、キャリア支援の現場で必要だと感じることは、厳しい就職戦線を勝ち抜ける力をいかにつけさせるかということ。そして、卒業後に活躍し得る社会人基礎力の素養を身に着けて社会に送

り出すことができるかということである。4年間の総仕上げとして、ただ就職が決まればよいということではなく、それぞれの学生に合った就職のサポートができるか、学生、進路先双方にとって良い出会いのきっかけ作りができるかが私たちに求められていることだと考えている。そのため企業訪問で得た情報と学生面談を通じて、学生が求める職種や適性などを見極めて求人情報の提供を行っている。

就職活動がスタートし各企業に応募する段階での支援は、各企業の採用試験の方法、求めている職種や人物像、面接対策やエントリーシートの記入方法など、就職試験のためのスキルや心構えなどといった事になってしまう。この段階において課題として感じることは、就職活動の段階に至るまでに、学生生活を通じていかに社会で求められる力を引き延ばすことができるかということである。

企業訪問を通じて人事担当者の言葉から社会で求める人物像のキーワードを集約すると、以下のような力にまとめることができる。

- ・ 周りの人を巻き込む力（リーダーシップ）
- ・ 相手の話を聴き、自分の意見を発信できる力（コミュニケーション力）

- ・ 相手の立場を理解して行動する力（思いやる心）
- ・ 困難な状況でも現状から逃げださない力（責任感・忍耐力）

・ 真面目にこつこつと積み重ねていく力（継続力）  
これらの力を身につけるために学業面での習得はもちろんではあるが、キャリアセンターでは、学生生活の中で正課外活動を通じて、学生の成長をサポートできるかということを大切にしている。その機会の場として柏レイソルでのインターンシップや聞き書きサークル、キャリアサークルなどの支援を行っているが、他にも様々な正課外活動を通じて、いろんな人との交流の中で、様々な価値観と接しながら、成功と失敗体験を積み重ね、先に示した求める人物像として挙げられる基礎的な素養を身に付けてほしいと考えている。時には学外での活動で他大学生との交流や世代の違う人たちとの交流から刺激を



受けて成長してほしい。それらの経験が、学生時代に特に打ち込んできたこととして、自分らしさを自信を持って語る事ができるのである。

また、人事担当者は、求める人物像の前に、基本的な生活習慣やマナー、違和感なく敬語が使えるか、挨拶がきちんとできるかなども見ている。これらのことは、就職活動を始めて急にできるものではなく、学生生活の間に習慣として身に付けていくべき事でもある。挨拶ぐらいいはできると思いかもしれないが、採用試験の緊張している状況では、相手に印象よく笑顔でさわやかに挨拶をするのは、意外と難しい。特に敬語や挨拶は、同世代同士ではなく、世代の違う社会人との接点から身に付けていく必要がある。大学内では、教職員との交流の中で、意識して会話することも一つの訓練の場ともなりうると思う。もちろん学外での活動においても身に付ける機会を持つことも必要である。

さて、4年生の就職活動が続く中、12月に入り3年生の就職活動もいよいよ本格化し面談も増えてきている。さて、4年生の就職活動が終わる前に、3年生の就職活動もいよいよ本格化し面談も増えてきている。さて、4年生の就職活動が終わる前に、3年生の就職活動もいよいよ本格化し面談も増えてきている。さて、4年生の就職活動が終わる前に、3年生の就職活動もいよいよ本格化し面談も増えてきている。

1・2年の間に部活動、ゼミ、寮生活などを通して、就職活動を終えた先輩から、就職活動が始まる前に何をしておく必要があるのか、就職活動での失敗例、成功例など生の声を聞くことも低学年次でできる活動の一つである。先輩後輩の縦の関係も強めてもらいたい。将来を見据えて、ちよつとした意識を持つだけでも、日々の過ごし方が違ってくるものだと思う。

キャリアセンターでは、このように正課、正課外ともに、充実した学生生活を送ってもらうことを切に願いつつ、一人ひとりの学生と向き合い、それぞれの希望や適性を見ながら就職支援を行っていききたい。

4年生においては、すぐに結果に結びつかないケ

た。4年生の就職活動が終わる前に3年生の就職活動が始まり、年度での区切りがない状況は、近年の就職支援状況の特徴でもある。就職活動期間が通年にわたり長期化している現状の表れでもある。

キャリアセンターでは、この長期化の現状から3年生と4年生の支援の重なりをできるだけ減らし支援体制を集中させるためにも、やるべき時に活動をスタートさせることで、幅広い選択肢の中から企業選びができるような状況を生み出したいと考えている。

そのためには、個々の活動の立ち上がりを早める必要性を感じている。遅くとも3年生の夏休みから具体的な就職活動を意識し、12月の求人情報の公開が就職活動のスタートではなく、12月1日までに自分の知っている企業や業界だけでなく、自分の知らない業界やいわゆるB to B企業にも目を向けて自分が働くイメージを膨らませながら、企業を見る目を養ってほしい。また、これまでの自分を振り返りながら就職活動中に必ず聞かれる学生時代に打ち込

ースもあるが、あきらめずに就職活動を続けていく中で、結果に結びついていくものである。就職活動が長期化して、途中で足を止めてしまう学生もいるが、少し休んだとしても足を止めずに、活動を続けてほしい。私たちは、活動が続く限りそのためのサポートを惜しまない。学生時代に頑張っ取り組んできたことは、自分自身の力となり、その後の人生の糧となる。就職内定は、ゴールではなく、その後の人生の通過点であり、本学を巣立って社会で大いに活躍し、幸せな人生を歩んでもらいたい。卒業後、時には壁にあたることもあるかもしれないが、逃げずに頑張り、一回りも二回りも成長した姿を見せてくれることを楽しみにしている。そして、どうしても行き詰り悩むことがあった時でも、遠慮なくキャンパスを訪ねてきてほしい。

フォト・アルバム—この1年—



入学式 (2012.4.2)



ボストン大学でのシンポジウムで「日本の道徳思想」を発表 (2012.4.5)



留学生歓迎懇親会 (2012.4.27)



野外昼食会 (2012.5.9)



第34回「訪日研修団」(主催:日本航空・他)の台湾大学生が来学 (2012.7.6)



第24回「1泊2日の体験入学」に69名の高校生が集う (2012.8.5~6)



スタディツアー「中東夏季研修」(2012.8.29~9.8)



ロンドンパラリンピックで国枝慎吾選手が史上初の2連覇達成 (2012.9.8 写真提供IMG)



留学生フェア (2012.10.18)



第2期生「全米模擬国連大会」に挑戦 (2012.10.26~28)



麗陵祭 (2012.11.2~4)



マレーシア国立サラワク大学学長来学「包括的な交流協定」に関する調印式 (2012.11.9)



英語劇グループが「レ・ミゼラブル」を学外公演 (2012.11.17)



JAL中国語スピーチコンテストで優勝の藤本尚輝さん (2012.12.26)



国際交流もちつき大会 (2012.12.7)



ミクロネシア・スタディツアー (2013.2.3~18)

「全日本きもの装いコンテスト世界大会」外国人の部で優勝の留学生・常楠さん(2012.4.8)

# 麗澤大学剣道部創部50年

（剣道を学んで）

麗澤大学剣道部OB会会長

藤井敬三

（第32期 ドイツ語学科卒）



平成24年11月3日、麗澤大学剣道部は創部50周年の記念OB会を開催し、東は青森から西は香川まで30数名のOB・OGが参加しました。OB会に先立ちOBと現役との稽古会を行いました。OB会に先立ちOBを含め20数名が現役の学生に稽古をつけ、OB同士も久々に竹刀を交えました。これは、剣道部の部活動が単に大学での部活動にとどまらず、多くのOBが未だに剣道の修業を続けているということであり、剣道を学び続ける真摯な態度に驚嘆しました。

麗澤大学の一つの部活動が50周年を迎えることは記念すべきことであり、またこうして50年間存続できたことは麗澤大学のご支援はもとより、歴代の先輩たち

機会も多くなりました。従い私の場合は自分の学生時代から通算すると、麗大剣道部50年の歴史のうち、44年間は剣道部に関わっていたこととなります。

剣道部創部当時の顧問（剣道部長）は、岡田晃先生のぼるでしたが、昭和48年には、奥野保明先生が顧問に就任され、以後平成20年に退任されるまでの35年間、顧問として剣道部の学生に親しくご指導いただきました。

昭和41年には、堀ノ内勇吉先生が師範に就任され、平成17年までの40年間、学生の指導にあたって戴きました。

堀ノ内先生は、難関中の難関と言われる剣道の最高



昭和46年頃（正門内側の旧道場）

がたすきをつないで来た結果であり、大変有り難いことと感謝しています。この機会に剣道部50年の歴史を振り返るとともに、剣道から学んだことを記します。

## 麗大剣道部の50年を振り返って

麗澤大学剣道部が創部されたのが、大学創立（昭和34年）の2年後の昭和36年（1961年）です。

私自身は昭和48年卒業後、商社に約30年勤務し、その間ドイツに6年、アメリカに5年と2度の海外駐在をしましたが、日本に居る時は週末や夏期合宿など大学の稽古に参加していました。特に平成16年にモラロジー研究所に奉職してからは、現役学生と稽古をする

段位「八段」を授与され、また最高の称号である「範士」も授与されましたが、我々剣道部員はそれ以上に先生の高潔な人格から多くを学びました。現在「麗大剣道部50年史」の編纂を予定しており、OBから写真や文章をお寄せいただいています。堀ノ内先生に関する文章が非常に多く、先生の教えが今なお多くのOBの心のなかに生きていることを痛感しました。先生は一昨年4月91歳で逝去されましたが、今更ながら堀ノ内先生が学生たちに与えた影響の大きさを実感しました。

麗大剣道部は、昭和36年の創部以来最初の30年ほどは、師範（堀ノ内先生）と顧問（奥野先生）という体制で、普段の稽古は学生が自主的に練習内容を考えて行っており、平成4年、麗澤大学に国際経済学部が増設され、学生数も飛躍的に多くなった年に森克昭氏が監督に就任され、以後20年間森監督が日々の稽古を通して学生の指導を行っています。

創部当初、麗澤大学では対外試合が禁止されていたこともあり、柏市民大会などには出場していません

が、大学間の対外試合には出場していませんでした。しかし、剣道部の活動が活発になり始めた昭和44年、当時の主将であった岡部道夫先輩（31期）などのご努力により、千葉県学生剣道連盟に加盟し千葉県大会に出場するようになり、対外試合への道が開けました。

千葉県大会に初出場した時、照下高正先輩（32期）が1年生で、いきなり個人戦で準優勝するという快挙がありました。以後、昭和52年には、女子が「関東大学選手権大会」への初出場を果たし、その後も先輩たちの活躍は続きましたが、特筆すべきは平成6年高橋康祐先輩（55期）が、初めて全日本出場を果たしたことです。それ以後も全国レベルでの活躍は少ないものの、色々な大会での戦績は枚挙に暇がありません。

平成17年には、森監督の尽力により関東近県の高校生を集めて「高校剣道練成会」を開催し、この練成会を6年継続した後、平成23年2月から規模も拡大した上で、「麗澤大学麗澤旗親善剣道大会」として開催しています。この大会には関東近県はもとより、福島県・愛知県などの遠方からも参加され、約50校から高

校生・教員・保護者などを合わせると800名以上の人たちが学園に集まってきました。学生たちは直接この大会を企画・運営することから、剣道の稽古以外の学びを体験しています。

合宿については、過去50年日本全国さまざまな所で行いましたが、ここ数年は群馬県の谷川講堂に宿泊して、埼玉の尚美学園大学と合同合宿を行っています。麗澤の学生約20名、尚美学園約50名、そして群馬県の高段者の先生、群馬県警など100名規模の合宿で、学生は多様な稽古で力をつけています。

## 剣道を学ぶ

私は堀ノ内先生に40年以上にわたって師事し、多くの学びと感化を受けました。現在は堀ノ内先生のご指示で、剣道界でつとに著名な岩立三郎範士八段から教えを受け、先生方から学んだことを夏期合宿の時などに微力ながら少しずつ学生に伝えさせていただいています。

剣道には昔から、「剣は心なり 心正しからざれば 剣また正しからず すべからく剣を学ばんと欲する者は まず心から学ぶべし」（幕末の剣豪島田虎之助）など心の教えが多く、このような剣道の言葉とともに、剣道の修行にもあてはまる創立者・廣池千九郎博士の『最高道徳の格言』などを引用しながら、いわゆる「座学」を行っています。

「途中困難最後必勝」という『格言』は、試合に賭ける学生が好む『格言』ですが、剣道の「平常心・不動心」を培うには、「無我の心はじめてよく良果を生ず」という『格言』を引き、勝つためには「相手に勝

ちたい・打ちたい」という「自我」が働くと相手にその心が見えてしまう。何事においても自我（欲）をと、無我・無欲で取り組むことではじめていい結果を得ることができると。「率先善を認め勇を鼓してこれを貫く」という『格

言』もあり、稽古の時はここぞという打突の好機には勇気を持って打ち込む必要があるが、普段の生活でも、善いと思つたこと（道徳）は率先して実行する勇気が必要である。「原因を追わず善後を図る」という『格言』では、試合で一本取られた時、一本取られたことに心を惑わ



昭和59年頃（旧麗高校舎）



50周年記念OB会（稽古に参加したOB）

され、それが後を引くことなく直ぐに心を立替えて後が善くなるように次の一本に集中する。すなわち人生において困難に遭遇した時も、そのことにくよくよするのではなく、早く立ち直ってベストな対応が出来るように全力を尽くすなど、廣池博士の『格言』には、人生上は勿論剣道の修行においても参考になる『格言』が多くあり、モラロジ（最高道徳）にも触れながら、人生・剣道の両方を学ぶように努めています。

### 「伝統を受け継ぐということ」

次に、「麗澤大学剣道部OB会報」（平成24年7月）に、「伝統を受け継ぐということ」と題して一文を掲載したのでその一部を抜粋します。

現在日本には、約150万人の剣道有段者がいると言われていますが、千年以上にわたり剣道を守り、育て、そして伝えてきた多くの先人のお陰で現在の剣道があり、剣道は日本の伝統文化そのものであると言われる所以です。

剣道で何よりすばらしいのはその精神性で、全日本剣道連盟が定めた剣道理念は、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」となっており、

竹刀で争う競技（闘争）に絶対的な精神性を付与していることになりました。この「人間形成の道」という文言がなければ、剣道はただ相手を叩く叩きあい

に陥る危険性があります。また、世界的には新渡戸稲造が百年以上前に英文で著した『武士道』は、欧米の日本研究のひとつのバイブルになったほどです。

麗澤大学の創立者・廣池千九郎博士は、モラロジ（道徳科学）のなかで、先人・先輩を尊重する伝統尊重の原理を説いています。伝統とは親・祖先であり、日本の発展に寄与してきた幾多の先人・先輩であり、国そのものになります。前の世代が築いたものを継承し発展させて、次の世代に伝えるという営みを続けて発展してきたのが日本社会です。

剣道では、「剣道は礼に始まり、礼に終わる」と教えていますが、「礼」とは相手を尊重することです。稽古の時に相手に礼をするだけでなく、普段の



50周年記念OB会（平成24年11月）

生活においても先生、先輩・後輩、親・兄弟など周りの人や、剣道を継承してきた過去の先人を尊重し、感謝することです。そして「礼に終わる」とは、剣道を続けているかどうかに関係なく、人間は終生礼の心を忘れてはならないという教えです。1年生が2年生の先輩を尊重し、2年生は3年生の先輩を尊

の歴史に思いをいたし、前の世代（先輩）を尊重し、次の世代（後輩）を慈しんで、正しい剣道とその精神性を伝え、次の50年の剣道部の伝統を築いていただきたいと思っています。

重するという縦の関係が、日本社会の人間関係の基本であり、社会秩序の源です。大学時代の先輩・後輩の関係が終生変わらないというのは、この日本社会の人間関係そのままです。

麗澤大学剣道部

学生の皆さんには、50年におよぶ麗澤大学剣道部

麗大剣道部のOBには、教職員として母校に残った先輩も多く、企業の社長を務められた先輩（浜井利一先輩〈29期〉・西裕康先輩〈31期〉）など多様な人材を擁し、若いOBも企業で、また教員などとして活躍しており、このような豊富な人材は剣道部の財産でもあります。

4年間剣道部員として過ごす間には、精神面・体力面など幾多の困難があります。過去には部員の少ない時期、多い時期、剣道のレベルが高い時、低い時など色々な時代がありました。先輩たちはその困難にめげず、営々と50年の歴史を築いて来られました。現在の部員が、また将来の部員が、必ずや次の百年に向けてたすきを引き継いでくれるものと確信しています。

# 難ありて有難し

麗澤空手50年の人づくり

麗澤大学空手道部監督 富田裕之

(第58期 中国語学科卒)



ゼロからの復活

「3対0で赤の勝ち！」

平成23年10月30日、日本武道館で開かれた関東大学空手道選手権。各校5人1チームで争われる団体組手の1回戦で、わが空手道部は価値ある「1勝」をあげた。続く2回戦で破れ、1部リーグ昇格戦に臨めなかったのだから、誇れる戦績とはいえない。けれども、試合場に立つことさえ出来なかった4年間を思う時、「麗大」の名を背負った後輩たちが堂々と技を競い、つかみとったその勝利は、実に価値ある1勝に感じられたのである。たった4人の部員のうち、1人が直前

で欠場し、副将と大将を欠くという逆境の中でつかんだ勝利でもあった。

この大会から、麗大空手道部は「学連（学生空手道連盟）」の試合に再び参戦するようになり、目下1部リーグ昇格をめざして稽古を積んでいる。部員ゼロの状態が何年も続き、廃部もやむなしかと悲嘆にくれた日からは、想像もできない今日である。

少人数ながらも活動を続けていた空手道部から、部員が1人もいなくなったのは平成20年の初夏のことだった。新入部員を獲得できないまま、4年生が卒業し、平成20年度は3年男子1名での稽古始めとなった。若手OBも手伝ってチラシをつくり、見学会を催

し、勧誘に手を尽くした。けれども新入部員は入らない。今日こそ新入生が訪ねてくるかもしれない——。一縷の希望を抱き、たった1人の部員と道場を開け、稽古を続けた。4月が終わり、5月が過ぎる。変化なく6月に入ったある日、夜の稽古のため道場の更衣室に入ると、着替えもせずに彼がたたずんでいた。「すみません。今日で退部とさせていただきます」。最後の部員が立ち去り、静まり返った道場の中で、私は呆然と立ち尽くした。その日から1年10か月、空手道部は部員ゼロのまま、休眠状態となる。創部50年の栄えある節目を目前にして、長年の歴史に幕を下ろしかねない危機に瀕していた。

誰のためのクラブか

瀕死の空手道部の救済に際して、私は学内に勤務する一番身近なOBながら、情けないことに、ほとんど役に立つことができなかった。では誰が空手道部を救ったのか。立役者は1人ではない。麗大空手道部の黄金期を創り、麗高空手道部を強豪に育てあげた野中道

男先生の働きかけ。平成22年春に入部した2人の新入生をつなぎとめるため、多忙な校務の中で指導を続けてくださった麗澤高校の西野徹先生の支え。また、OBでもないのに快くクラブの顧問を引き受け、入部してくれそうな学生の確保に奔走してくださった麗澤大学教授・清水千弘先生のご尽力……。クラブの危機を知ったOB諸先輩たちが、退社後に電車を乗り継いで来学し、部員に稽古をつけてくれた。そうした諸々の助力を得て、翌23年春にはさらに2人の新入部員も迎えることができ、空手道部は息を吹き返したのである。

なぜあの状態から復活ができたのか。この原稿を書くにあたり、突き詰めて考えるうち、浮かび上がったキーワードがあった。それが「伝統」の2文字である。立て直しを図るうにも成果が得られず悶々とした時期、自問自答しつづけたことがある。それは「自分是谁のために空手道部を存続させようとしているのか」という問いだ。学生のためだろうか。とはいえ門戸を開けど、入部を希望する学生は一向に現れない。学生に必要とされていないクラブを、OBが無理に延命す

る意味がどこにあるのか。それともOB自身が、自分の青春を費やしたクラブがなくなるのは寂しいから、存続させようとしているのか。そうとすれば、部員確保の努力はOBの自己満足のためということになる：。悩んだ末に私は、私自身が空手道部の4年間から何を得たのかを振り返ることで、答えをたぐりよせようと考えた。

### 運命を変えた小雨の夜

実は、空手道部が廃部の危機に直面したのは今回が初めてではない。私が麗大に入学した平成8年春、空手道部は実部員が4年生3名のみという崖っぷちの状態だった。そこへ事情も知らず飛び込んだのが私である。

入部が決まった日のことは今も鮮明に覚えている。4月下旬の薄暮の迫る六限後、私は入るべきクラブを探して、武道館に足を運んだ。お目当ては、映画『少林寺』に憧れての少林寺拳法部。少林寺の道場は2階である。靴を脱ぎ、階段へ進むと、1階の道場の奥で



新入部員時代。入部の縁をつくってくれた小日向先輩（55期、右端）、空手界で活躍するOBの小山先輩（39期、右から2人目）と。

まやかに世話を焼いてくれた。それは毎週土曜日に、無償で指導に駆けつけてくださるOBの先輩方も同じだった。OB稽古はきつい。特に夏合宿では千本突き、百本形、十人組手と気力体力の限界を試された。

稽古に励む2人組の姿が目止まった。もしかしてここが少林寺拳法部？。迷って道場内に目をこらす姿が、空手稽古中の先輩に発見され、私はたちまち捕獲された。「見学？うれしい。どうぞ中に入って」。

先輩は道場内にさっとパイプ椅子を置いて私を座らせ、稽古を再開した。ここに最後まで座っていたら入部させられてしまう。焦るが、腰を上げるタイミングがつかめない。チャンスは1時間後。稽古の締めくくりに先輩たちが「正面に礼」と座礼を始めた。先輩の視界から逃れたこの瞬間を逃さず、私はそくさと道場を抜け出た。外は小雨に変わっている。胸をなでおろし5、6歩、武道館を離れた時、後方でバンツと扉の開く音がしたかと思うと、先輩が素足のまま駆け出して、私の袖をつかんだ。帰してなるものか。と鬼気迫る小日向美帆先輩の形相に、私は0・2秒で白旗を揚げた。

先輩たちは空手に真剣だった。稽古中に歯を見せることなど許さないといい緊張感の毎日である。けれども道場を一步出ればよき兄、よき姉として優しく、こ

しかし一度、道衣を脱げば、頼もしい人生の先輩として、世間知らずの後輩を温かく導いてくれた。そうして1年のうちに同期部員は4人に増え、翌春には5人の新入部員を迎え、廃部の不安は霧消した。

自分がOBとなり、現役をサポートする立場となった今、当時の先輩たちの苦労がよくわかる。なぜ先輩たちは、ああも熱心に後輩を指導し、懸命にクラブを支えようとされたのか。そこに、自分個人の利益を打算する姿勢は少しも感じられなかった。ただこの入門した後輩に空手の道を求める喜びを伝え、わかち合いたい、その思い一つだったのだと、今しみじみとわかる。

### 何一つ無駄はない

正直に告白すると、空手道部の4年間で、稽古を心底楽しんで、と思えたことはあまりなかった。空手の稽古は基本、形、組手に大別され、麗澤空手は代々に「基本」の鍛錬を重視する。「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」（宮本武蔵）といわれるとお

り、武道は延々とした己との闘いである。武道館へ向かう足取りは総じて重かった。

こう書くと、まるで麗大で空手をしたことを後悔しているかのように受け取られるかもしれない。正反對である。楽しいと思っただことは確かに少ない。けれども、麗澤で空手をやって「よかった」と思えることは山ほどある。逃げ出したくなる稽古のおかげで、真に痛みを分かち合える友を得た。地獄の千本突きのおかげで、どんな試練も必ず乗り越えられる勇気を得た。

白帯の2年生で主将となり、背伸びをして失敗し、たくさん恥をかいた。その経験が社会人となった今、何よりの肥やしとなっている。空手道部で過ごした4年間に、何一つ無駄はなかった。そう思える今、1人でも多くの麗大生に、麗澤空手を経験してほしいと心から思う。かつて私を指導してくださった先輩方も、きっと同じ思いを抱いていたはずだ。

あの日、麗大空手道部と出会えていなかったら、卒業後の私の人生は大きく変質していただろう。少人数でも部が存続していたからこそ、私は空手道部につな

がることができた。空手道部を守り、育てることに青春を投じた、数十代にわたる先輩方のご努力によって「伝統」は継承され、その「伝統」が人を育て続けている。細くとも長く、一日でも長く、この伝統を受け継がなければならぬ。いつでも学生たちが麗澤空手につながれる機会を残しておくことが、私の使命のように今は思う。

### 伝統の灯を未来へ

平成24年11月、第9回ホームカミングデイの特別招待クラブとなった空手道部は、全OB対象の会としては久方ぶりのOB会を開いた。主幹事である私の段取りが悪く、150名を超えるOBOGのうち、参加者は32名にとどまったが、参加を見送られた多くの先輩方から、顔も知らぬ現役部員たちのためにと無数のご支援を頂戴した。

懇親会に先立ち、道場で野中道男先生の指導のもとOB稽古が行われた。現役時代ならなんなくこなせたメニューも、社会人13年目の身体には実にこたえる。



恩師の野中道男先生を囲んで  
(平成24年11月3日、ホーカミングデイ2012でのOB稽古にて)

きつかった。もう無理だ、少し休もう。そう思い、仲間を見ると、みな額に汗をし、歯を食いしばりながら、真剣に自分と闘っていた。仲間のそうした姿が、力をくれた。麗澤で空手をやって「よかった」と同じ実感を共有できる大切な仲間たちとの稽古を、私は心底「楽しい」と感じる事ができた。

学生時代、目先の苦しみの意味がつかみきれず、心が折れそうになる時、OBの先輩方がよき道しるべ役となり、空手の道から逸れぬよう手を差し伸べてくれた。今まさに現役部員たちが、少人数のしんどい環境の中で汗をかきつづけている。彼らもまた、麗澤で空手をやって「よかった」と思える日まで。かけがえない仲間と、稽古を心から楽しめるその日まで。半世紀にわたる伝統の灯を、これからも守り続けていきたいと思う。

押忍

## 趣味が支えてくれた独立

（第57期 国際経営学科卒）  
武士侯尚也



大学を卒業してもう15年、サラリーマン経験を経て

3年前より私は京都でゲストハウスを営んでおります。ゲストハウスとはどういうものかというアメニティサービスなどを省いた素泊まりの宿です。お客様は子供から高齢者まで、職業も学生さんからお医者さんまで、人種も多種多様といった感じでいろいろな方がみえます。

この仕事にいたるまで色々ありましたが、学生時代に経験したことが今日大きく影響していると今になってみれば感じます。

趣味とアルバイト漬けの学生時代

私の趣味はオートバイ・旅・アウトドアです。当時、私はオートバイが大好きで、暇があればあちこち乗り回しておりました。そのため、授業にはあまり出ず当然単位が取れるかどうかの状況に陥り、ある日あまりに授業に出ないため、なんでそんなに授業にでないのかと呼び出されたのが恩師との出会いでした。そこで詰問されるのかと思いきや、まったくそんなことはなく、逆にこちらはあまりに寛大な対応をされ不安になる始末。これが道徳科学の究極の姿かと都合よく解釈し感心したものでした。この恩師が趣味を持つことの意義を説いてくれ、それが今の私にとっての大き

な支えとなっております。

当然、オートバイに乗るためにはお金がかかります。そのお金を稼ぐ為にはアルバイトをする必要があります。そこで選んだのがガソリンスタンド。そこで意気投合したのが1つ年下の後輩で彼とはその後、世界を一緒に旅することになりました。



今もバイクは乗り続けています！

社会人から旅人へ

いろいろな先生方に懇願し単位をいただき、ぎりぎり卒業でき、また運よく広告代理店に就職できました。しかし、特にやりたいこともなく、面白そうだなというイメージで見つけた仕事のため、入って半年ほどしたら飽きてきました。ただ、辞めても何をしたいというのがないため、悶々としたサラリーマン生活を送っております。

そんな頃、高校を卒業してすぐ就職した前述のガソリンスタンドで出会った彼も同じような悩みを抱えておりました（もともと彼は3年以上働いておりましたが）。そんな時、昔スタンドで客待ちをしている際「いつかはオーストラリアをバイクで走りたい」という夢を語っていたことを思い出しました。

お互い今がその時かもと妙な勢いがあり、どうせなら「いきなりオーストラリアに行くのではなく徹底的に旅をしよう」ということになり、モスクワからシベリア鉄道にのり陸路でいけるころまでオーストラリアに近づこうということになりました。

結局、私は会社を10カ月で辞めてしまい旅にでてしまいました。彼とはその後ベトナムで喧嘩して別れ、仲直りしてオーストラリアで合流し、そのころはお互い単調な景色に飽きてしまいバイク旅行の熱はいつしか冷め旅のほうが好きになり、農園で働きお金をため南米に行くことが次の目標になっていました。この旅はモスクワスタートでアジア、オーストラリア、南米を經由して1年後終了しました。

今思えば、本当に仕事がつまらなくなるとかして現実から逃避しなかったその口実として旅があったのかなと思います（出国時23歳）。

#### サラリーマン↓また旅人へ

実は旅をしている際、常時帰国後の就職が気になっておりました。たかが10カ月で仕事をやめるような人間に就職先があるか……。

帰国後は、運良く外資のクライアントが中心の広告代理店に就職できました。ただ、一度芽生えてしまった旅の木はなかなか枯れません。さらに悪いことに顧

客先で勤務する娘と知り合ったのですがお互い仕事がつまらない、そして旅が好きということで意気投合し付き合うようになり、2人で旅立つことになりました。結局2社目は3年弱しか働いておりません（出国時27歳）。

#### 旅人↓サラリーマンへ

また1年ほど旅をして帰ってきてから悩むことは就職。ただ、前回の旅とは違い自分でも仕事はそれなりに一生懸命やっていたのでブランドがある割には適度なスキル



バヌアツ共和国ヤスール火山火口にて

を持つての就職活動となりました。適当に選ぶとまた仕事が飽きてしまうので、やりたいこと・できることとを整理して時間をかけてじっくりと選びました。その結果、運良く入社できたのが玩具メーカーです。また食い扶持を得ることもできるようになったため前述の彼女とも結婚することができました（結婚29歳）。

#### サラリーマン↓自営業者へ

玩具メーカーでは最初、テレビゲームの部門にいましたが、アウトドアの趣味が共通する他部署の上司に誘われ子供向けアウトドア事業企画を推進する業務についておりました。ただ、サラリーマンの宿命か自分のやりたい仕事ができない状況になりました。

我儘な私は、今までですと辞めて旅や転職といった道に逃げ込んでいましたが、家庭ももっているため今回はそうはいきません。家内も一緒に「自分たちが今後どうやって生きていきたいのか？ 何がしたいのか？ できるのか？」と、いったことを毎日自問自答していたところ一つの方向性が見えました。それは、

旅行者をエンターテインするビジネスです。そこで出たひとつの結論がゲストハウスです。

何とか始めることもでき、細々とですが生きていくことができるようになった今、私の目標はこの宿に泊まったら現地の情報や交通手段、習い事など旅行者が求めるソフトが充実している宿にすることです（事業開始35歳）。



「ろうじ屋」外観

若い皆さんへ

まず私が皆さんにお伝えしたいのが、こんな直感の勢いでいく人生でもなんとかなるということです。無謀は良くないかと思いますが、若いうちはいくらでも方向修正が利きますので果敢にチャレンジしてください。

あとは「こんな人生を歩みたいな」といったビジョンをおぼろげでもいいので持ってください。今はおぼろげでも必ずその方向に自分は引っ張られていきますし、歳を経るにつれそれがどんどん具現化されていくのではないかと思います。

さらに、趣味を自分なりに徹底的に貫き、そして続けてください。そのビジョンを具現化する次のステージに上げてくれる強力なツールになる時が突然やってきますので。

もし、モヤモヤしたときは遠慮なくうちに遊びにいらしてください。私でよければいくらでも相談にのらせていただきます。では楽しい人生を！

最後に卒業以来、年月を重ねるにつれすっかり疎遠

になっていた麗澤ですが先日偶然お泊まりいただいた職員の方が先生方に私の現況を報告してくれたことによりご連絡をいただき、それがきっかけでこのような形でまた麗澤に関わることができ感謝しております。諸先生方、職員の皆様ありがとうございます。

若い方や外国人が宿泊するといったイメージのゲストハウスですが、当宿はもう少し年齢の高い方にも耐えられるようにしておりますので、かなりご高齢の方でもお泊りいただいております。

当宿の詳細は、[kyotobase.com](http://kyotobase.com)を参照下さい。

京都府京都市中京区西ノ京池ノ内町22-58

「ろうじ屋」 TEL 075-432-8494

卒業生の今②

## 人と出逢い、言葉に導かれて

本間 泰司（芸名 鈴木本泰司）

（第61期 中国語学科卒）



麗澤大学時代

大学時代、私は時間があると決まって井出元先生はじめの研究室を訪れていた。当時研究室には常に誰かが居た。先輩が居たり、先輩が居たり、外部の人が居たり、卒業生もよく訪れていた。そして大抵夜遅くまで皆で語り合った。誰かの恋の悩み、進路、家庭、哲学、会社、人間関係、趣味、政治と多岐に亘り語り合った。

当時は何の気なしにそのような時間を過ごしていたが、今振り返るとあの研究室での多種多様な人々との対話が、現在の自分のコミュニケーション能力に多大な影響を与えているのが分かる。他人の話を聞く力、

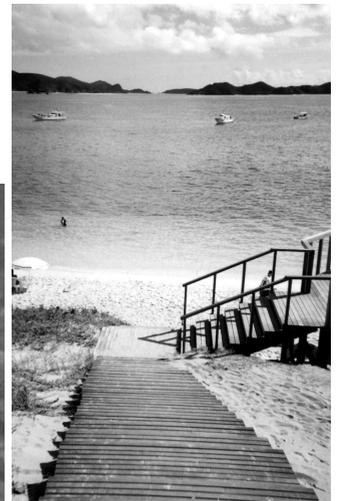
他人の価値観を許容する力、特にこの2点は確実にこの時期に鍛えられた。

沖縄時代

麗大を5年かけて卒業した私は、就職という道を選ばずに沖縄の阿嘉島という離島で民宿の手伝い（アルバイト）をしていた。阿嘉島は沖縄本島から高速船で45分程の場所に在る座間味諸島の中の一つの島だ。人口は約300人で、コミュニティが小さい分人間関係もとても濃かった。私はこの阿嘉島での生活を通して田舎で暮らすことの良い面、悪い面の両方を知った。しかし良い面の方が圧倒的に多かった。私はこの島

で、ある男性と知り合った。仮に名前をT氏としておこう。T氏も私と同じように、アルバイトとして他の民宿で働いていた。歳の頃は30代前半で、褐色に焼けた肌がっしりした体型、そして強面の顔と一見近寄りたがたいオーラの持ち主だった。しかしそんな彼と私はなぜか気が合い、次第に仲良くなっていった。T氏は元々東京出身で、以前は都内で会社を経営していた。一時期は億単位で稼いでいたらしい。青山の高級マンションに住み、夜な夜な六本木などの歓楽街で遊び尽くしていたそうだ。ところがある時、急にそのような、金、金、金、金が全ての生活が嫌になり、住んでいたマンションや稼いだお金を全て当時付き合っていた彼女に渡し、会社も人に譲り、本人は5万円だけを財布に入れて島に来たという。

ある日、仕事が終わる私はT氏といつものように夜のビーチで泡盛を片手に他のバイト仲間や島民、観光客の人達と大いに飲んで盛り上がっていた。そして宴もひと段落した頃、いつになく真剣な口調で私は彼に話しかけた。「俺、自分のやりたいことが分からない



阿嘉島の海で

んだ。どうしたら見つかるのかな」T氏はジッと私の目を見て言った。「泰司、あのな、人生はな、何がしたいかが大事なんじゃないか。どう生きたいかが大事なんだ。別に何をしてもいい。大事なのは生き方だ。いいか、なるべく早く自分



の生き方を見つけろ」当時の私にはこの言葉の意味がよく分からなかった。しかしなぜか心に深く刺さった。目の前には暗く静かな海、頭上には有りえない程の無数の星が煌めいていた。そして私は心の中で、何度も何度も彼の言葉を反芻していた。

### ジュエリー職人時代

26歳になった私は、沖縄から引き上げて東京阿佐ヶ谷のジュエリーショップで働いていた。幼い頃からモノを作ることが好きだったし、手先も器用だったからだ。店舗の奥が作業場になっており、日々そこで、プラチナや金などを加工して宝飾品の修理をしたり、ダイヤやエメラルドなどの宝石を台座に石留めをする仕事をしていた。

そんな仕事を始めてから3年近くの月日が経った頃、私はやっと仕事にも慣れ始め、様々なことができようになるようになっていた。と同時に、日々の生活にある種の違和感を感じ始めていた。当時、私はある女性と付き合っていた。歳は同じくらいで、出版社に勤めるカ

メラマンだった。ある日の休日、私は彼女と吉祥寺でご飯を食べていた。ひとしきりお互いの近況を話し終えた頃、なんととはなしに話題が夢や目標、仕事の話になっていった。彼女は言った。「泰司は本当に今の仕事が好きでやっているの？ 私は本当にカメラの仕事が好きでやっているわ。決して自分に、これがやりたいことのハズだ」と言い聞かせてはいない」私はドキッとした。私は自分に言い聞かせていた。細かい作業が得意だから今の仕事に向いているハズだ。これがやりたいことのハズだ、と。しかし、心の奥底では違和感を感じていた。心から熱くなるような日々を過ごせてはいなかったのだ。

その日を境に、私の心はざわめきだしていた。心の奥底で、小さな火種が燃え始めているのが分かった。理屈ではなく、ドキドキワクワクしてしまうもの、「それ」のことを考えると時間も忘れてしまうもの、私にとっての「それ」は「演技」「エンターテインメント」だった。

私は大学時代、有志の学友達と共に「劇団・福袋」

なるものを結成し、学校内の小劇場で公演を打っていた。その頃の私は「演技」というものの面白さ、奥深さに夢中にな



っていた。そして人前でパフォーマンスすることの快感に目覚めてしまっていた。しかし当時学生だった私には、役者を職業として生きていく程の覚悟はなかった。本当は役者を続けたかったが、自分なんか役者で食べていけるハズがない、と勝手に思い込んでいた。しかし彼女の言葉が、眠っていた私の火種に火をつけた。数カ月後、私は会社を辞めた。そして小さな芸能事務所の門を叩いた。「人生は一度きりだ。二度はない。ならば心のど真ん中を歩いてみよう。自分を欺くのはやめよう」29歳、本当の人生が始まった。

そしてこれから

私は常に心掛けている、自身の気持ちに素直であれど。私は、何か問題が起きた時は、その問題をまるごと食べてしまうことにしている。まず腹に入れる、そして考える、最後は気持ちで決断する。考えに考え抜いた後の最初の一步はなるべく軽い方がいい。人生は誰しも一度きりである。これだけが平等だ。そして人生は一日だ。朝起きて人生が始まり、夜眠りに着いたら人生は終わる。その繰り返しだ。

大学時代は跳び箱競技で言うところの「ロイター板」だ。社会という、見上げれば目も眩む程巨大な箱を飛び越えるための踏切り板だ。様々な価値観と出会い、時に喜び、時に打ちのめされながら、強くしなやかなロイター板を作ることが大学時代にすべきことだ。なにも大学時代に見つかるものではなく、社会に出てからは、大学時代に見つかるものではなく、社会に出てから徐々に見つかっていくものだ。卒業後の人生如何によって、大学時代の意味は決まるのだ。「これから、いい大学時代を見つけていこう」私は心に誓った。

卒業生の今⑤

## ドイツとの出会い

外務省

別所涼子(旧姓見目)

(第62期 ドイツ語学科卒)



「昨日、日本から遠く離れたヨーロッパにある、東ドイツと西ドイツという国が再び一つのドイツになりました。この国は戦争により一つの国が長い間東と西に分断されていました……」と、世界地図を見せながらドイツ統一について話をする小学校の担任の言葉を、今でもはつきりと覚えています。これが生まれて初めてドイツという国を私が意識した瞬間でした。その時、自分が将来ドイツという国に関わりを持つとは夢にも思いませんでした。中学生の時に外国への憧れから同世代のドイツ人と文通を始めることになり、その影響から大学でドイツ語を専攻することに決めました。大学を卒業して10年が過ぎた今、大学時代を少し

振り返ってみたいと思います。

大学に入学した次の日から谷川岳でフレッシュマンキャンプが行われました。同じ目的を持って入学した仲間とは初対面でも直ぐに打ち解け、そこでできた友人は今でもかけがえのない大切な存在です。

ドイツ語の授業は厳しかったです、とにかく毎日楽しく片道2時間の通学も苦ではありませんでした。学祭でのドイツ語喫茶やドイツ語劇、第九を歌う会など楽しい思い出がたくさんあります。ドイツだけではなく、留学生との交流を通してアジアに対しても興味を持つようになりました。

2年生後期から大学生活最大のイベントである留学生活が始まりました。私が選んだ留学先は旧東ドイツにあるイェナ大学です。文通していた友人がイェナの近くに住んでいたため、週末にはよく彼女の実家にお世話になっていました。そのおかげでドイツ人の生活を直に知ることができました。特に物質的な豊かさよりも、心の豊かに重きを置く生活様式にとっても感銘を受けました。彼女とはその後も互いに日本、ドイツを訪問し合う関係が続いています。

私がドイツで生活したのは統一から10年が経過していましたが、旧東ドイツでは街の中心であって



2012年3月に行われた故石村先生の最終講義にて

頃、特攻隊に所属して毎日生きるか死ぬかという日々を送っていました」と思いがけない言葉が返ってきました。私はその言葉に胸が痛みました。20歳の私にとって死とはあまりに遠い存在で向き合うことなく、留学生生活を謳歌していたわけですが、同じ歳で死を意識しなければならなかったおじいさんの目に私たちはどのように映ったのでしょうか。麗澤大学では多くの学生が留学を経験していて、それが特別なことだと思っていなかった私は、元気で留学生生活を送っている自分がいかに恵まれているのかということに気づき、家族や大学の先生方への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

留学での1年間は、国籍や年齢を超えた人とのつながりがありました。その中から見えたことは物の捉え方は1つではないと言うことです。どちらか正しく、どちらが間違っているかではなくいろいろな考え方があっていいのです。また、この1年ほど日本を意識した年はありませんでした。その度にいかに無知であったかということを感じ知らされ、恥ずかしい思いをし

も一歩路地に入ると廃墟がいくつもあり、旧西ドイツのそれと比べると随分暗い部分もありました。旅行中に会ったドイツ人に「イェナで勉強していると話す」と、そんな街に人は住んでいるのか?と旧東ドイツをあらさまに軽視するような発言もよく耳にし、授業で聞いていた「東西の心の壁」が存在しているということを実感しました。旧東ドイツで勤務していた小学校の先生は、統一後、以前生徒に教えていたことが、ある日を境に間違っていたということを伝えなければならなかったことへの苦悩を話してくれました。旧東西間でいろいろな問題はあるにせよ、ドイツ国民にとって統一は喜ばしい事変わりありません。小学生の時に耳にした「統一」がドイツ人にとっていかに大きな出来事であったかとうことを肌で感じた貴重な1年間でした。

また、留学中忘れられない出来事がありました。休暇を利用してプラハを友人と旅行中に日本人観光客のおじいさんに出会いました。年齢を聞かれ答えると、「あなた方はいい時代に生まれましたね。私が20歳の時、それと同時に日本には素晴らしい物が沢山あるということにも気が付きました。学生のみならずには是非在学中に外国へ出て、離れた所から日本を見て色々な事を感じて欲しいと思います。」

留学後、日本的な何かをしたいという思いから友人と茶道サークルに入りました。始めた当初お点前を覚えるのは二の次で、毎週おいしいお茶と季節ごとに変わるお菓子を頂けるのが楽しみで行っていました。それがお稽古を重ねるうちにお茶室にいる時間は、畳に座りきちんと手をついてお辞儀をしたり、道具を丁寧に扱ったりする等、普段の生活ではいい加減にしまっている事をきちんとする大切な時間になりました。現在も細々と茶道を続けていて、四季（自然）を五感で感じられる茶道を楽しんでいます。学ぶことが多く何年やっても初心者状態から抜け出せない私ですが、もう少し上達したらいつか茶道を通じて世界中の人と交流するのが夢です。茶道と出会うことができたのも大学生活があったからこそだと思います。



ドイツ人の親友夫妻と  
柴又にて(2012年夏)

ここからは、今私がしていることについて少し触れたいと思います。現在私は外国から日本を訪問する賓客の受け入れ業務をする部署で勤務しています。具体的には賓客の日本滞在が円滑に進むよう空港、宿舎、日程等の調整業務です。毎回賓客国側の担当者と直接調整を行うため、日本にいながらにして外国を感じられる部署と言えます。

ミャンマー、アルメニア、クウェート、ジンバブエ、コスタリカ、パナマ等今まで全く縁のなかった国も多くありました。2011年10月にドイツのヴルフ

前大統領が訪日した際の受け入れ業務を担当し、久しぶりにドイツ語に触れる機会がありました。

空港に飛行機が到着し、賓客がトラップから降りてくる時は毎回ここから始まるという緊張感がありますし、日本での日程をこなし笑顔で飛行機に乗り込む姿を目にすると無事に終わったとほっとしています。これからも日本を訪れた外国からの賓客が日本に対して良い印象を持っていただけるような仕事をしていきたいと思えます。それは、良い印象が良好な2国間関係の発展に繋がっていくと思うからです。

最後になりましたが、私にとつて麗澤大学とは、「いつでも帰っておいでよ」と言ってくれる、家庭のような暖かい場所です。一人ひとりの距離感がとても近いことが麗澤大学の良さだと思います。卒業した今年にも一度くらい大学に行く機会がありますが、自然豊かな大学の敷地に足を踏み入れるといつもほっとした気持ちになります。今年もまた見事に桜が咲いているのでしょうか。そのうちまたふらっと遊びに行かせていただきます。

## 仲間と掴んだ夢の舞台 『レ・ミゼラブル』

英語劇グループ部長 根本元氣

(国際交流・国際協力専攻3年)



2012年11月17日、約75年に及ぶ英語劇グループの歴史に新たな1ページが刻まれた。以前伝統であった外部公演の復活である。夢の舞台でのカーテンコール。拍手を浴びた際にメンバー達から溢れ出した涙には言葉では言い尽くせない想いがあつた。

今回の作品『レ・ミゼラブル』の世界では、主人公ジャン・バルジャンを始めとする様々なキャラクター達がフランス革命の過酷な時代を生き抜く姿が描かれている。自分が夢見た現実を残酷にも捻じ曲げられてしまう人々。それでもその時代を必死に駆け抜け、生き抜こうとする彼らの姿は今を生きる私たちに何か訴えるものがある。

そんなキャラクター達を演じるのは決して簡単なことではなかった。公演の度に部員達が必ず向き合わなければならぬ役作りの過程には、観客には知られぬことの無い「役者たちのドラマ」がある。劇を作る上で一番難しい事は台詞を覚えることだと勘違いされるが、それは違う。表現力、英語の発音などの練習はそれ以上に難しい。その上で、劇を構成する上で欠かせない音響、証明、舞台装置、衣装などさまざまなマネジメントをこなしていかなければならない。

しかし、この一筋縄ではいかない劇作りだからこそ得られるものがある。英語力やコミュニケーション力もそうだが、一番大きいのは大切な仲間を持てること

である。私にとって仲間たちは「家族」のような存在である。楽しい時は声を上げて一緒に笑うことができる。でもいざ仲間が苦しんでいると知ると自然に寄り添ってあげられる。そんな風に仲間を大切に想う力が今回の外部公演を成功に導く原動力だったと私は信じている。そして、その力を育んでくれるのが英語劇グループなのである。

私たちのモットーは「Strive to do better」。これは一つの目標に向けて努力し、またそこで見えた新しい目標に向けて日々励むという意味がある。劇に完璧はない。だからこそ反省も得られるし、自分自身の成長も感じる事が出来る。どんな美しい劇よりも、この仲間たちと共にがむしゃらに作り上げた世界にただ一つの劇の方が私は好きである。部員たちはそれを理解しているからこそ、これからも邁進していくのだと思う。こんな素晴らしいチームに所属していることを私は心から誇りに思う。



課外活動…英語劇グループの学外公演②

## 真のコミュニケーション能力を培う英語劇

～HARD-WORKING, BUT HAPPY!

監督 マーウィン・トリキアン



学園祭での公演に続いて、麗澤大学英語劇グループは学外公演で、ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』を演じ、観客の多くは、大学生の演劇とは思えない高いレベルに感動しました。英語を母国語としない大学生のグループがどのようなようにして、英語劇をこのように完成させ、上演を成し遂げることができたのでしょうか。

一つの劇を創り上げるためには、多くの異なる要素を組み合わせて準備しなければならないので、演劇制作には多大な努力と献身、そして協力体制を必要とします。演劇は、巨大なジグソーパズルという例えがありますが、部員それぞれが持つ個性が調和し、最終的

には美しい絵が完成したのだと思います。

いかなるチーム・プロジェクトにおいても成功の鍵を握るのは、メンバーの献身さです。学生たちは4か月以上に渡る練習時間を確保するために、自分の自由時間を投げだすほどの覚悟がなければなりません。学生の多くはアルバイトや長い通学時間、宿題や課題を抱えているので、これは本当に特別なことです。たった1人でも役者がいないとそのシーンのリハーサルは成立しないので休むわけにはいきません。このように一つの目的に向かって専念することを通して部員間の結束や絆は卒業後もずっと続くのでしょうか。

ほとんどのメンバーは入部当初は舞台経験もなく、

演技できるほどの英語力も持っていません。日本語であつても演技をするというのは非常に難しいのに、外国語で納得がいくように演じるということは大変なことです。しかし、300行の長セリフがある主役のジャン・バルジャンを演じた西村慎太郎君であつても、台本を覚えることは一番簡単な作業だつたと言うでしょう。はつきりとした発音や発声、自然体に聞こえるイントネーションと役柄の感情表現を身に付ける方ははるかに難しいのです。それに加えて、立ち振る舞い、ジェスチャー、表情と他の役者へのリアクションも気を付けなければなりませんし、全てを自然に使いこなす必要があります。多様な語彙と言ひ回しを覚えながら他の役者が何を言っているか理解しなければならぬので、演劇は英語を学ぶには強力な効果的な手段です。さらに演技指導は英語で行われるので、学生は自分の役を学ぶために英語で会話することに慣れていきます。入部当初は2、3単語をつなぎ合わせるのに苦労した学生であつても、1年後には自信を持って英語で話すことができるようになります。



活からの創造的脱出です。舞台上立つひとときの間は我を忘れて、もう一人の自分(王様、悪人、道化師、恋人、そして殺人者にさえ)になることができます。確かに、テレビゲーム、マンガ、カラオケ、コスプレといった現実逃避の手段は日本に多く

ありますが、大勢でひとつのものを創造するということがはるかに価値があります。だからこそ、学生たちは英語劇に夢中になれるのです。お互いを思い合う心温かいグループの一員となること、創造的で表現力豊かな活動、素晴らしいものを作り上げるというこ



演劇では、演技だけでなく、舞台装置、小道具、衣裳デザインから縫製、照明、音楽、メイク、広報活動、その他多数の作業を計画的にこなすことが求められます。すべてが整った状態で劇を成功させるためには、チームワークが欠かせないでしょう。練習の前には各担当責任者が集まり、お互いの進捗状況を英語で確認しあいます。もちろん、リーダーひとりではできないので部員間の協働が必要とされ、誰かの力になり、支えたいという感情が次第に芽生えます。彼らが卒業して社会に出るとき、そのような「人間力」を持っていることは非常に貴重なことです。

素晴らしいことに、英語劇のメンバーは学生生活の大部分を一生懸命、演劇に捧げています。多くの問題に直面するときもありますが、彼らは演劇が大好きです。当然のことながら演技とは楽しみであり、日常生活と、それらは、麗澤大学の中で私たち英語劇グループを非常に特別な存在にするのです。



# 転機の夏

経済学部助教 圓丸哲麻



昨年の夏、私は、新任教員のための本校主催の谷川研修、また同じく新任教員を対象とした八王子大学セミナーハウス主催の、2つの研修を受けさせて頂きました。正直、研修を受ける前は、「せっかくの夏休みが……」という気持ちもあり若干ではありますが気が乗らない気持ちも心の奥に持ち合わせていたのですが、この2つの研修が自身の抱えていた悩みを解消し、後に大きな契機となるはその当時は知る由もありませんでした。

## 直面していた2つの課題

本校に迎えて頂いて半年が過ぎ、私は「学生との関

わり方」と「講義の進め方」に関して2つの課題に直面していました。

特に一番戸惑っていたのは、非常勤講師とは違い「専任講師」として「どのように学生と向かい合うか」という「学生との関わり方」でした。それは、本校の正規スタッフとして、講義においてただ専門科目の知識を提供するだけでなく、「麗澤大学の教育理念である『知徳一体』を実現し、学生を育成する上で、最も重要な『心構え』とは何か」を、自身に問うものでもありました。

また私は前期に、入学式直後に経済学部の新入生を対象に行う導入授業「社会科学分析入門」、新1年生

を対象の本学独自の実践教育プログラム「ビジネスゲーム」を中核とした「経営学入門ゼミナール」、同じく新1年生を対象の経営学の基礎を学ぶオムニバス形式講義「経営学概論」、2年生を対象の文化祭において模擬店出店を

することで実際に経営を体験する「経営学基礎演習」、経営学部以外の学生を対象とした「ビジネスゲーム」、そして私の研究専門領域の講義「広告文化論」の、計6講義を担当させて頂いたのですが、その中で「広告文



化論」において「一部の積極的な学生しか講義内でのディスカッションに参加しない」という課題も抱えていました。

もともと私が専門領域とするマーケティングは、活発な議論を行い、プランを練り上げることを主体とした実践の学問であり、また私自身も前職の百貨店において、新店舗に関する企画立案を担当する中で「議論に自主的に参加すること」の重要性を痛感しておりました。そのため、「講義」の基本コンセプト



として『活発なディスカッション』を掲げていたにもかかわらず、しかしながらその実行が思うようになってはいませんでした。

このような想いを持ち、谷川研修に参加させて頂いた訳ですが、その課題は本校の諸先生方、またスタッフの方々の想いを知るにつれ解消されていくこととなりました。

### 谷川研修とピーター・F・ドラッカー

というのも、2日間ではありますが、ディスカッションや懇親会、お風呂場での何気ない会話を通して、「どの先生も建学の精神に精通して、学生起点で学校作りを考えていらっしやること」「そんな学生を大切にしている先生、スタッフの方々と、学部、年齢、国籍を越えてコミュニケーションがとれる環境があること」に気付いたからです。そんな先生方に、私が抱えていた課題を相談させて頂くと、我がことのようにとても親身になってご指導頂きました。

具体的には、「学生との関わり方」に関しては、「学

生起点に立ち、彼、彼女らと接するのを基本軸としながらも、自身のできることでできないことを先に明示しておいたほうがいい」というご示唆。また「講義の進め方」に関しましては、「講義が開始する30分前に教室に向かい、事前に学生とコミュニケーションをとる」や、「着席すべき席を割り当てる」、「事前に課題を与え、それを予習しなければ講義についていけないようにする」等、多くのご提案やご指導を賜うことができました。

更に経済学部だけでなく、普段あまりコミュニケーションをとる機会がない外国語学部の先生方とお話しさせて頂く機会にも恵まれたことで、学生へのアプローチに視野も広がり、インターネットを活用した教育支援システムであるMoodle2の活用等、後期に向けて新たな可能性を見出すこともできました。

様々な専門的知識を角度からの具体的に明快なお言葉と、その一方で皆様に共通する「学生に対する、真摯な情熱」は、まさに知識だけでなく、最も重要な「心構え」を教えてくださいださるものでした。

そしてとても興味深いことに、『知徳一体』を可能にするこの「真摯さ」こそ、実はかの高名な経営学者ピーター・F・ドラッカーが「マネジャーに求める最も根本的で重要な資質」として掲げたものであると、(後になってからではありますが)気づかされました。

有名な書籍ということもあり、ご存じな方も多いかと思いますが少し紹介させて頂きますと、ドラッカーはその著書『Management: Tasks, Responsibilities, Practices (邦題)『マネジメント 基本と原則』』において、マネジャーの資質について次のように述べています(『マネジメント 基本と原則』130ページより)。

マネジャーは、人という特殊な資源とともに仕事する。人は、ともに働く者に特別の資源を要求する。



人を管理する能

力、議長役や面接の能力を学ぶことができる。管理体制、昇進制度、報奨制度を通じて人材開発に有効な方策を講ずることもできる。だがそれだけでは十分ではない。根本的な資質が必要である。真摯さである。最近では、愛想よくすること、人を助けること、人づきあいをよくすることが、マネジャーの資質として重視されている。そのようなことで十分ではありませんが、

(中略)

マネジャーの仕事は、体系的な分析の対象となる。マネジャーにできないならできないことは、それほど教わらなくとも学ぶことができる。しかし、学ぶことのできない資質、後天的に獲得することのできない資質、始めから身につけていなければならない資質が、一つだけある。才能ではない。真摯さである。

私は、本研修を受け、「学生との関わり方」の本質としての「真摯な心構え」を、そして「講義の進め



した。

1つは、桜美林大学リベラルアーツ学群教授荒木晶子先生の「4つの学習スタイルに即した講義スタイル」、

もう一つは明星大学人

文学部教授菊地滋夫先生の「BRD (Brief Report of the Day)、当日レポート方式の実践」というお話でした。<sup>(※2)</sup>

前者は、「学習者(学習をする人)は心理学的に4つスタイル(タイプ)からなる」というものであり、「それら4つの学習スタイル(タイプ)に適用する内容を90分の講義にすべて盛り込むべし」という講義でした。

この4つの学習スタイル(タイプ)とは、①CE (Concrete Experience) ≡ 直接体験型(直感で学ぶタイプ、人との関わり方から学習するタイプ)、②RO (Reflective Observation) ≡ 内省観察型(さまざまな角度

方」として様々なテクニクを手に入れることができたと感じています。また私は、自身の課題を解消できただけでなく、個人的にも新たな友人もでき、そして何より建学の精神「知徳一体」がしっかり継承されていること、私自身もその精神を体現する一員であることを強く自覚できたという大きな実りでありました。谷川研修を終え、自身の職務への決意を新たにしたい1週間後、八王子大学セミナーハウス主催の第2回新任教員研修セミナーに参加させて頂いたことも、私の新たな知見を得る機会となりました。

### 八王子研修で学んだ講義術

新任教員セミナーは、国公立、私立の垣根を越え、またジャンルを越えて、北は北海道、南は沖縄県まで多種多様の先生方が参加される研修でした。

主なテーマとしては、(私の直面していた課題でもある)「学生との関わり方」と「講義の進め方」に焦点を当てた研修でしたが、とても勉強になったのは「講義の進め方」に関してご講義いただいた2つの内容で

から、注意深く、忍耐強く、物事を観察することで、学習、判断するタイプ)、③AC (Abstract Conceptualization) ≡ 抽象的概念型(思考しながら学ぶタイプ、論理的に思考し、アイデアを分析するタイプ)、④AE (Active Experimentation) ≡ 試行実験型(行動をすることで学ぶタイプ、未知なことにも果敢にとりくむタイプ)の4つで、CE傾向とは「具体例を用いた講義を好む」とか、RO傾向とは「テストを好む」、またAC傾向とは「理論書を読んだり、理論的な講義を好む」、そして最後にAE傾向とは「グループ討論を好む」というものでした。

「多くの場合、学生が受ける講義は、講義者の学習スタイルがそのまま反映されてしまっているため、その学習スタイルと合わない受講者にとっては時として苦痛となっている」という指摘を受け、私も後期の講義を建設するにあたりそれらの4つの要素を組み込んだ講義を行うよう配慮しなければならぬということに初めて気づかされました。

他方、菊地先生の「BRD (Brief Report of the Day)」、

当日レポート方式の実践」では、南山大学の宇田先生が提唱なさった「学生の積極性と論理力の向上を目的とし、①確認、②構想、③情報収集、④執筆までの流れを、1時間半の講義の中で完了させる」という講義手法であるBRDの活用方法や有用性、更にご自身の講義に取り入れた際の学生の反応などを詳細にお話し頂きました。

私の講義コンセプトは、上述のように『活発なディスカッション』ということもあり、学生に論理力や発表力を身に付けてほしいと思っていたので、このBRDによって「講義に対して学生が積極的になった」、「論理力が向上したことで、結果として就職活動のエントリーシートを書く能力が向上した」等のお話はとても興味深く、また衝撃的でもありました。

先の谷川研修では、大学教員の心得を学ばせて頂き、そしてこの八王子大学セミナーでは、実践的なレクチャーを受け、前期終了時に抱えておりました、「講義の進め方」や「学生との関わり方」等の悩みを解消することができました。

早速、後期授業を迎えるにあたり、真摯な気持ちを持ちつつ、上記の講義スタイルに関連する書籍を手配し自身の講義内容を見直しました。そのお蔭から、「経営学基礎演習」では、学生たちは活発な議論を行い、積極的に行動し、結果として高い売上と利益を得ることができました。

また後期の担当科目である「環境マーケティング」においてBRDを試したところ、多くの学生の文章力に向上が見られただけでなく、講義内において自信を持って質問や発言をしてくれる学生が増やすことができました。

### 今後の心がけとして

昨年の夏、本校より研修を受けさせて頂けたことは、私が専任教員に今後精進する上で大きな転機となったと感じています。

そして、今後は、この経験を踏まえ、より学生起点に立ち、本校が目指す人間像、「大きな志をもって真理を探究し、高い品性と深い英知を備えた人物」「自

然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈しみ育てる心を有する人物」「自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物」を育成できるように、自身も精進していくことを強く決意し、また楽しんで職務にあたることを心に誓い、より一層の努力を心がけていきます。

最後となりましたが、本研修に携わっていただきました諸先生方、スタッフの皆様にご感謝の意を表します。とても緊張していたところ、気さくにお声をお掛け頂いたり、お酒の席に誘って頂いたり等、感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

### 【参考文献】

- (※1) ピーター・F・ドラッカー(著)、上田惇生(訳)(2001)『マネジメント——基本と原則「エッセンシャル版」』ダイヤモンド社
- (※2) 宇田光(著)(2005)『大学講義の改革——BRD方式の提案』北大路書房

# 支援の先に見える差別化された大学

学務部学生支援グループ 井上貴広



思えば麗澤との出会いは淡白なものだった。高校生の頃、進路希望先は専門学校にしていたため大学自体に興味関心が無く、受験勉強もそれなりで過ごしていた。センター試験が近づく頃、急遽4年制大学を受験することになったが、大学受験に対する知識も無ければ、進学希望の大学も無かったため、単純に自宅から近い大学を探していた。その中で偶然に「麗澤大学」を知り、受験をすることにした。結果、センター試験で合格はしたものの気分は晴れず、入学式当日まで浮かない顔をしていた。正直に、私は不本意入学生だった。

入学式も終わり、いよいよ本格的に授業が始まっ

た。入門ゼミナールでは尊敬する先生の下で良き友人ができ、経済学は勉強もした事がなかったが、意外にも楽しいと感じることができた。気が付けばバスケットボールのサークルにも所属し、朝から晩まで授業や課外活動のため大学に入り浸るくらい思い切り麗澤大学での生活を楽しんでいる私があった。不本意入学生だった私が本当の麗澤大生になれた、入学してから約半年間の出来事である。

その後の大学生活は非常に充実しており、4年間は驚くほど早く過ぎていった。良き友人、先輩、後輩に囲まれ、たくさんのお恩師と出会う事もできた。本音では不本意で入学した麗澤大学だったが、卒業するころ

には何度生まれ変わろうが麗澤大学に入学したいと思えるくらい、麗澤大学が好きになっていった。そして、卒業後は縁あって麗澤大学で勤務できることになった。今でも母校で働ける事を不思議に思う自分がいるが、入職してから3年目を迎えようとしている今、ようやく地に足が付いてきたと自負している。

現在、私が所属している「学生支援グループ」は学生と最も多く接する窓口である。私からすると、「学生と接する」というよりは未だ「後輩と接する」という雰囲気ではあるが、どうすればもっと学生のためになるだろうか、奮闘の毎日を過ごしている。多くの学生と接しているが、真の学生支援とは何かといつも考えさせられる。そもそも「支援」とは何かと考えるべきなのかもしれない。入職したばかりの頃、学生には優しくしていれば良いとばかり考えていた。もちろん、この方法なら学生に嫌われる事は無い。しかし、優しくするだけが学生のためになっているのかと考えると少し疑問になる。入職してからの約2年間、試行錯誤の繰り返しだった。対応によっては本気で学生に

学に入学して良かった」という気持ちを味わって欲しいと思っている。学生時代、私が麗澤大学に満足できた理由は、麗澤大学の生活が充実し、自らの成長を強く実感することができたからである。そのため、学生には大学生活の中で成長を感じてほしいと思っている。4年間の大学生活では、資格の習得、課外活動への参加、留学といったように様々な事に挑戦できる。このような挑戦を私は余すことなく支援したい。挑戦することなく支援したくない。挑戦する事で得られる失敗や成功の体験は必ず未来への大きな力になると思っている。単純な支援では挑戦できる場を創造するだけで終わってしまうが、私の目指す「支援の先を見据えた支援」とは、挑戦によって得られた成長を、今後どのよ



先に学生はどのような体験をし、どのような成長をするのか。では否認した場合にはどうなるのか。と、アドバイスにしても、私の言動が学生にどのような影響を与えるのか。ただのお人好しの支援をして終わりではなく、支援した先で学生に何が待ち受けているのかを考えて、支援しなければいけないと感じている。

麗澤大学の学生には1人残らず、私と同じ「麗澤大に活かすことができるのかを考え支援するという事である。常に支援の先を見据える事が、結果的に学生の成長にもなり、自身の成長にもなると考えている。

良い例がある。私は平成24年度の入学式・卒業式プロジェクトという、職員と学生が一丸となり、入学式と卒業式をプロデュースするプロジェクトに携わらせて頂いた。このプロジェクトは、学生の各式を学生が中心となり創造する、言わばピアサポートの1つであるが、同時に「挑戦の場」にもなっている。この学生の挑戦を支援する立場が我々職員メンバーの役目なのだが、ただ挑戦させるといふ事だけにしないよう、挑戦の先で彼らが得られる事は何か、そして、今後の人生でこの経験をどのように活かすことができるのかを意識していた。プロジェクトの完遂が第一の目標ではあるが、挑戦の場を創造するだけに終わらず、挑戦の先をも考え、学生に成長を感じて貰う事がこのプロジェクトの裏側の目標となっていた。このコラムを執筆している現在、プロジェクトは終わっていないが、き

っと、学生と共に大きな成長をしている自分がいると確信している。

支援の先を見据えた支援が上手く実現すれば、どれほどの学生が生き生きと学生生活を送ることができただろうかと考える。それは結果として「差別化された取り組み」となり「差別化された大学」となるはずである。大学も増えては潰れを繰り返し、厳しい競争を強いられているが、その中でひと際強い輝きを放つためには他の大学とは違う、差別化された大学にする必要がある。しかし、差別化を目指すに当たり、「差別化する」という目標を念頭に置いては意味が無いと感じている。あくまで、学生の事を考え、学生基点に立った支援を行う事を念頭に置き実行すれば、自然と麗澤大学は他大学と差別化されるはずである。つまり差別化された大学とは結果であって、学生基点に立つことを第1に掲げることが重要なのである。前述の入学式・卒業式プロジェクトにしても、普段の窓口対応一つにしても、麗澤大学には差別化された大学になれる要素で溢れている。この要素を私達は見逃してはいけ

ない。見逃してしまうと学生の成長を止めてしまう事はもちろん、われわれ職員や大学自体の成長をも止め兼ねない。学生と最も身近に接することができる学生支援グループは、学生が持っている意見や向上心を最前線で感じることが出来る。差別化された大学に対し、私達が担う役割は重い物だと改めて感じている。最前線だからこそ難しい事も多いが、それ以上に感動も多い。良かれと思ってアドバイスした事が結果として学生に負担をかけることになることもあれば、私の言動に救われたという学生もいる。まさに学生と一緒に becoming 一喜一憂する日々であるが、時には本当に投げ出したくなる事もある。しかし、私はもう学生でもなければ、ただの優しい先輩でも無い。一人の教育者なのである。学生への支援に対し、絶対に諦めたり投げ出したりはしない。お互いが良き成長をするために真っ向勝負である。だから学生を、私自身を、麗澤大学を信じて、これからの未来を共に歩み続けて行きたい。

「フィルム

## 職員としての私の使命

「ホームカミングデイを通して

学事部教育研究支援グループ 松野大祐



「ホームカミングデイ」。この行事を知らない方もいるかと思いますが、まずはこの行事について、簡単に説明します。

ホームカミングデイとは年に1回、麗澤大学の卒業生を対象として開催される行事です。現在の学生の活動、また、2012年度の会場でもあったReitaku Student Plaza はなみずきや校舎あすなる、2013年度から運用予定の国際寮等、様変わりしていく麗澤大学を卒業生に見てもらおう場となっています。さらに懐かしの恩師や先輩、同級生、後輩との再会もあり、ホームカミングデイはまさに「麗澤大学Family」の集いの場となっています。

2012年度のホームカミングデイは、第1回ホームカミングデイ以来の麗澤祭との同時開催となりました。第49回麗澤祭の『Smile ring—スマイリング』というテーマのもと、ホームカミングデイも同じテーマに則り、「笑顔の輪」を大切にしたいイベント運営ができたのではないかと感じています。2012年度は主にキャンパスツアーと座談会の2つのイベントを実施しました。キャンパスツアーでは年々変化していく麗澤大学を説明すると同時に、麗澤祭を見て回るような工夫をし、座談会では現役の先生方だけではなく、退職された先生方もお招きして、卒業生に対してまるで学生当時に戻ったかのような空間を創り出すことが

きました。その他にも新規グッズを6点(タンブラー、麗澤コーヒー、付箋、USBメモリー、携帯スタンド、万年筆)作成し、本学のインターンシップ生が手掛けた柏レイソルとのコラボグッズであるサブレットとに販売をしたり、展示会場では2010年から2012年度までの主なトピックや、海外で活躍する卒業生の紹介をしたりと、イベント以外の部分にも力を入れました。また、普段はお子様が見てなかなか自由のためにキッズルームを設けるなどを配慮した結果、総勢約300名の卒業生や名誉教授、教員OBOG、教



新規グッズも加わり大盛況

職員等に参加していただき、参加した方には十分に満足していただけたのではないのでしょうか。

私は現在、麗澤大学に奉職して3年目となりますが、縁あって1年目からホームカミングデイの事務局を務めています。

先に述べたとおり、ホームカミングデイは「麗澤Family」の集いの場として、懐かしの校舎や恩師、先輩、同級生、後輩との再会の機会となっておりますが、卒業してすぐに職員となった私にとって、正直なところ昨年度までの2年間はホームカミングデイの開催の意味を見出せずに仕事をしていました。それはき



新学生寮見学や麗陵祭など盛りだくさんのキャンパスツアー

つと私自身が卒業してからも麗澤大学へ毎日通っているためか、懐かしいという想いがほとんどない状態であったと、今では考える事ができません。

私が卒業した外国語学部中国語学科(現・外国語学部外国語学科中国語専攻)は、熱心な先生方が多かったか留学する人が多いことで有名でした。入学時に約60名いた私の同級



生も、4年間で卒業できたのは恐らく6割から7割程度であったと記憶しています。従って私が卒業した後にも友人が周りにたくさんおり、麗澤大学へ奉職してからも学生時代とほとんど変わらぬ光景が広がっていました。このような状況であったためか卒業した感覚がない状態が続き、同窓会等があっても積極的に参加をしない事がしばしばありました。しかし3年目を迎えた2012年度、卒業した同級生と久々にホームカミングデイで出会ったことで、私の気持ちに変化が見られました。2012年度は麗陵祭との同時開催のためか、私の同級生も数多くホームカミングデイに参加をしていました。中には卒業後初めて会う同級生もあり、同級生を見かけた瞬間、一言で言い表すとすれば「ほっ」とした気持ちになりました。

現在、大学を卒業してから3年以内の離職率が約3割となっていることは有名な話ですが、幸い今回再会した同級生の中に離職した人はいないにしろ、「辞めたい」と思っている人が大部分を占めていました(これが冗談か否かは定かではありません)。私は麗澤大学

の職員として奉職していることにありがたさを感じただけではなく、私の社会人としての意識が低い状態であったことを思い知らされました。私が普段経験をしていない様々な職種についている同級生の売上や成績が第一の世界が、事務職の私にとってはとても新鮮で、売上という形で所属する会社に直接貢献している実感があることが羨ましくもありました。しかし、一見華やかに見えるその世界も、話を聞くと私が想像できないほどの苦勞と努力が伝わってきました。夜遅くまで仕事をしているだけでなく、帰ってから寝る間も惜しんで勉強をしているなどの話を聞き、そのような中間を作って母校を訪れている姿を見て、私には何ができるのだろうかと考えた末に、例えばごく一部の卒業生であれ、私の同級生と麗澤大学をつなぐ「懸け橋」となることを決意しました。新しく社会人を迎えるにあたって、恐らく最初にそびえたつ壁は職場での「コミュニケーション」であると思います。4年間（もしくはそれ以上）の大学生活でできたコミュニケーションから離れ、最初は一人、社会と奮闘しなければならぬ

時、自然と思い返すのは同級生と笑い合い、時には泣いたり喧嘩したりした大学生活ではないかと思つていきます。このような環境を常に用意し、在学生はもちろんのこと、卒業生へ配慮することも、大学職員としての立派な使命であると感じました。

現在、「いじめ」や「不登校」「核家族化」等、人間関係が希薄化していることを表す言葉を耳にする機会が多くなりました。また、情報化社会となった今日、インターネット上で顔も知らない人との会話を楽しむことができるため、現実世界から逃避してしまう人もいるかと思つています。人と関わることは疲れる時も確かにありますが、その自分自身にプラスに働くことが多いと考えています。しかし、万が一そのような状況に疲れてしまったときには、友人達と過ごした学生時代を思い返し、時間があれば麗澤大学へ帰ってきて、同級生等の仲間と語らう場を設けてはいかがでしょうか。私達教職員一同は、いつでも皆様を心よりお待ちしております。

## コラム

# そこまで本気になれるワケ

高安美紗稀  
(英語・英米文化専攻3年)



「ただいまより、第49回麗澤大学麗陵祭を開催致します」。

私の開催宣言で、第49回麗陵祭は幕を開けました。「学園祭を作るって楽しそう」「先輩達も面白そう」……3年前、そんな気持ちで麗陵祭実行委員会に入会しました。1年生で企画局ゲスト班に所属、2年生でゲスト班班長を務め、迎えた3年目。最初、3年目は辞めるつもりでした。なぜなら、留学やボランティア、アルバイトといった「やりたいこと」があったからです。しかし、私は1・2年生のときの経験が忘れられず、「また皆で一つのことを成し遂げたい」という思いが心のどこかにありました。それが、私の本当



「ただいまより、第49回麗澤大学麗陵祭を開催致します」

に「やりたいこと」だと気付き、3年目も続けるという決断に至りました。そんな私が委員長を拝命し、私の開催宣言で麗陵祭が始まるとは夢にも思ってもいませんでした。

「委員長って、忙しそうだし責任は重いし大変だよね」委員長に就任してから、友達によく言われていました。実際、その通りです。委員会全体を統括する最高責任者が暇なわけがないし、責任が軽いはずもなく、楽なはずがありません。しかし、そのとき私はいつもこう答えていました。「大変だけど、それが委員長の楽しいところだよ」と。大変さが楽しさに変わるほどの本気になれるワケは何なのか。それを伝えようと思います。

私たち麗陵祭実行委員会は、前年度の麗陵祭が終わってから直ぐに、次年度に向けて準備を始めています。企画・広報・装飾・総務・対外といった5つの局で、月曜日の放課後には必ず会議を行い、それに従って作業を行います。またそれにプラスして、各局のリーダー格のメンバーは、資料を承認するための会議や

週1・2度の会議とはいえ、空き時間や放課後、休日や長期休暇を使用し、1年をかけて作業をしていかなければ到底麗陵祭本番には間に合いません。

私は局には所属していませんが、委員長という委員



スマイルで迎えます

合宿で意見交換をします。そこで承認された企画資料を学生支援グループに確認をもらい、受けた指摘や内容の漏れがあれば再度検討・チェックを繰り返し、承認されてやっと一つの企画を作る準備が整うのです。



開催に向けて連日の作業が続く

会の最高責任者であるので、役割は多岐に渡ります。全ての資料のチェックと承認、会議の議題決定、教職員の方々が出席する会議への参加、学友会本部との折衝、駅や警察署への挨拶といったことから、企画の進行状況の確認、局の状況を観察、相談にのったり、アドバイスをしたりなど、業務的なことから意識的なことまで仕事如山ほど溜まることも珍しくありません。その度に、何度も困難に直面しました。

「山のような仕事、立ちほだかる壁……これらのがどこが楽しいのだろうか？」おそらくまだそう思っているでしょう。しかし、そんなときメンバーの楽しんでいる顔、どうしようと思っている顔、たまに見せる厳しい顔、思いつきり笑っている顔……それが私のパワーになるのです。メンバーが麗陵祭というたった3日間のために、全員が一丸となって一生懸命になっている姿を見れば、それが私のパワーとなります。そこから当日の様子を思い描くだけで、大変なことも楽しさに変わってしまうのです。

最後の瞬間まで麗陵祭がどうなるか分からないこと

も楽しさのポイントでもあります。「いかに多くの人とワクワクやドキドキを共有し、感動出来るか」これが、麗陵祭が成功するか否かの明暗を分けるキーポイントになると思います。いくつもの広告媒体、汗水流して完成したイベントやオブジェ、模擬出店や展示の準備が整っても、来場者が来ないことには麗陵祭は始まらないし、来場者そして麗澤大学の学生が「楽しい!」「満足!」と思ってもらえなければ、開催する意味がないとも思っています。

いくら事前準備をしても、当日は何が起るかわかりません。実際、想定外のハプニングがあらゆるところで起きました。そのようなことがあると分かっているながらも、「1人でも多く、1回でも多く、麗陵祭という場で楽しさを共有したい」というメンバー一人ひとりの想いが、私にとって楽しさの源なのです。それを積み重ねることで、最後に感動のフィナーレを迎えることが出来ます。フィナーレイベントでの花火を見て、「参加して良かった」「楽しかった」「感動した」と実感して初めて、麗陵祭が成功したと言えるので

す。そう感じたいからこそ、ここに至るまでの連続する困難でさえも楽しさのうちのなのです。

以上の楽しさに共通していること、それは、人々との繋がりでです。メンバーはもちろん、参加団体のみなさんや教職員の方々、地域の方々との交流が私の力の源となっていました。それがあつたからこそ、いくつものハードルも越え、困難も楽しさとして捉えることが出来、私は常に笑顔でいられたのです。日々の活動の中で、人々の繋がりを実感する瞬間が沢山ありました。それを感じる度に、私のモチベーションも高くなり、何事にも全力投球をすることが出来たのです。麗陵祭が終わり、メンバーから「委員会に入って良かった」「辞めないで良かった」「楽しかった」「ありがとう」といった声を沢山もらい、また、来場者や学生からも「楽しかった」「来年もまた来ます」といった声もいただきました。大変なことでも楽しいと感じられ、人と人との繋がりが「形」になって現れる……それが、私を本気にさせてくれていたのです。

## 震災ボランティア 学生の持続的な活動

東日本大震災から約2年が過ぎようとしています。一時的な支援よりも、震災直後の気持ちを風化させずに持続的活動を行うことが最も大切であり、かつ一番難しいとされるなか、麗澤大学の学生たちによる被災地支援活動の報告です。



鈴木冬華

(英語・英米文化専攻3年)



東日本大震災が起きたのは、高校の卒業式から10日後のことでした。当時は、テレビの報道を眺めるだけでしたが、直接的な体験をしないと分からないことが多いと感じたのが、震災ボランティアを始めたきっかけです。

2012年の夏には、学内SNSサイトで知った日本

財団主催の「大学生ボランティア隊」に応募しました。宮城県気仙沼市での活動が決まったときは、がれき撤去や漁業援助などを想像していましたが、実際は仮設住宅を訪問して現地の方々の話し相手となり、心のケアを行う活動が多かったように感じます。唐桑町に長く住んでいる方のお宅で、震災当時の映像を見ながら体験をお聞きする機会もありました。風化させないように、学生たちに事実を伝えていくことが大切だと話してくれました。また、観光復興を目的とした活動として、津波の影響で道路を塞いでいた倒木の除去、ごみ拾い、観光地の看板を修復といった作業も経験しました。他大学の学生たちとの交流が深まったのも良い経験で、何度もボランティアに足を運んでいる学生と知り合い、刺激を受けたのを覚えています。

今回の活動で一番印象に残っているのは唐桑町の方々がとても優しくかったことです。ボランティアで訪れたの

に、反対に元気をもらいました。辛い体験を話してくれた地元の方が「またいつでも帰って来てね」と言ってくださり、胸が熱くなりました。その経験が忘れられず、12月に石巻市でのボランティアにも続けて参加をしました。今回訪れた唐桑町も石巻市も、私にとって「被災地」という認識から「大切な場所」に変わりました。

### 竹田如月

(国際交流・国際協力専攻3年)



私は、震災が起きてからこれまでに6回現地に足を運んだことになりました。

はじめは、2011年6月に津波の被害にあった民宿の片づけを手伝いました。流された家財道具の山を端から少しずつ掘り起こして、種類分けをしたのが最初の活動です。泥にまみれて作業をした後、お風呂もない小さな部屋で寝袋を重ね合わせて雑魚寝をするという想像以上の環境でした。震災から約1年が経過した2012年2月、山元町の学生カフェに参加しました。学生カフェとは、阪神淡路大震災で起きた「孤独死」という問題を東日本大震災で起こさないために、現地の方々と学生が

交流をしながら心のケアをしていくことを目的としています。学生カフェでは、山元町の子供たちが私の顔を覚えてくれて、訪れる度に一緒に遊んだり、たくさん話をしたりと私の方が楽しんでいきます。近くの仮設住宅に住む方々と顔を合わせ、話を聞く機会がたくさんあるので、学生カフェにはこれからも参加していきたいと思っています。

初めて訪れたときと6回目の活動では、全く内容が異なります。その違いはニーズの変化にあると考えています。津波の被害にあった場所が今では空き地になり、「復旧」しても「復興」はしていないというところが多くあります。活動が続けていくには何度も現地を訪れ、様子を知り、現地の方々が必要としているものを感じとることが必要ですし、変化に気付くためには現地の方々との繋がりが、きちんと向き合う姿勢が大事です。

同級生からは「まだボランティアをしているの？」と言われたこともありませんが、今だからこそ必要なボランティアがたくさんあると思います。今までつくりあげてきた繋がりが今後も途切れることなく、学生であるからこそできる活動を続けて、学内にも情報発信していきたいと思っています。

## 私は、あなたを忘れない

（命はひとつ、ひとりにひとつ）

麗澤大学聞き書きサークル

麗澤大学に学ぶ若者たちは、東日本大震災を経験して、一つの決意をした。被災者からの話を聞き、学生たちのボランティア活動をまとめ、自分の思いを述べ、そして「忘れない」ために記録をのこすことを。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

私たちはつい少し前に起こったことを忘れてはいけません。東日本大震災という大きな出来事を。

けれども、多くの人は多少の不便があるにしろ、震災前とほぼ変わらない生活を送っている。それゆえ、東日本大震災で大きな傷を負った東北を、まるで他人事のように思ってしまう。

— 現地へ赴くことは出来ずとも、今出来ることを。今でも皆さんは実行しているだろうか。

被災された方々は口をそろえて「忘れないで」という。それは、震災直後と比べると、ボランティアの数が減っていたり、テレビで被災地の映像が流れたりするこ

とが減っていることをひしひしと感じているからだろう。私たちはこう思う。「決して忘れたわけではないのだ」と。

けれど、震災直後の気持ちや考えは本当に変わらないだろうか。どう考えようと、違いを一番感じているのが被災者の方々だ。

1995年の阪神・淡路大震災、2007年の新潟中越沖地震、そして、2011年に起こった東日本大震災。

どうして、日本人はこれまで起こった出来事を忘れ、平然と日常生活を送っているのだろうか。

私たちは忘れない。決して、忘れない。たくさん亡くなった人を、未だ行方の分からない人を。そして、家を失い、職場をなくして被災された人、ふるさとを捨てざるを得なくなった人たちを。

今でも震災を考えるだけで胸が苦しくなる。けれども、辛いのはたくさんものを失い、たくさんの人が亡

〈図書紹介〉

『グローバル時代の幸福と社会的責任  
——日本のモラル、アメリカのモラル』

K. ライアン他編著／中山理他監訳  
麗澤大学出版会



本書は、麗澤大学の道德科学教育センターがボストン大学教育学部の人格・社会的責任センターとの共同プロジェクトとして、2011年6月にアメリカのチャールズ・タトル社から出版し、国際的評価を得ている *Happiness and Virtue beyond East and West: Toward a New Global Responsibility* の日本語訳版です。

原書の執筆には、本学からは道德科学教育センター長でもある中山理学長をはじめ、水野修次郎教授、堀内一史教授ら9名が、ボストン大学からはケヴィン・ライアン教授ら3名があたり、幸福実現のために不可欠の9つの徳——勇氣・正義・慈愛・感謝・知恵・内省・尊敬・責任・節制を東西文化それぞれの視点から分かりやすく説き明かしています。

〈目次〉

- 第1章 勇氣 中山 理／ケヴィン・ライアン
- 第2章 正義 足立智孝／バーニス・ラーナー
- 第3章 慈愛 岩佐信道／バーニス・ラーナー
- 第4章 感謝 中山 理／水野修次郎／カレン・E・ポーリン
- 第5章 知恵 堀内一史／山田 順／ケヴィン・ライアン
- 第6章 内省 水野修次郎／カレン・E・ポーリン
- 第7章 尊敬 井出 元／ケヴィン・ライアン
- 第8章 責任 大野正英／中山 理／バーニス・ラーナー
- 第9章 節制 北川治男／水野修次郎／カレン・E・ポーリン

◇四六判・356頁・定価1890円（税込）

くなった被害の多い地域の人々。  
自分の大切な人やものを失い、言葉にすることも嫌だ  
という人は存在する。けれども、伝えたいと考えている  
人もいる。  
苦しい思いを抱えていても、それを言葉にし、後世に  
伝えることが一番大切だと私たちは思う。そんな手助け  
をしたい、自分たちが記憶し、忘れないために何かしたい  
そう考え、多くの人が、被災した方々の話を聞く機会  
として、2011年8月にシンポ  
ジウムを開催した。  
けれども、もつと多くの人にこ  
の貴重な話を知ってもらいたい。  
そんな願いから、私たち聞き書  
きサークルは「文字に残す」こと  
にした。  
聞き書きという、個人らしさが  
出る話、口調は、本人が自分に語  
りかけてくるよう。  
みんな違う存在で、命も個人も  
一人に一つ。  
聞き書きは、まさにそれを表現



小田豊二・真殿 達監修／  
麗澤大学聞き書き  
サークル編  
定価1260円（税込）／  
麗澤大学出版会

してくる。  
頭に相手を思い浮かべ、一つひとつの言葉が相手から  
聞いたように感じる。  
それはまさに、後世へと語り継げられる「聃記」のよう。  
けれども、後世へ伝えるにあたって、忘れてはいけない  
こと。  
それは「被災者は東北だけ」ではない。  
「日本全土」が「被災者」ということである。  
（本書「まえがき」より）  
※「聃記（せつき）」文字ではなく言葉で、耳から耳  
へと語り継がれていく物語。つまり伝承のこと。宮崎  
駿監督の造語（「もののけ姫」アシタカ聃記）より）

## 『高校生のための道徳教科書』

麗澤大学道徳科学教育センター監修  
麗澤大学出版会



麗澤大学道徳科学教育センターでは、道徳・倫理、グローバル時代の社会的責任などの研究やその成果を国内外に発信しています。その一環として編纂した大学のテキスト『大学生のための道徳教科書』（2009年）、『大学生のための道徳教科書 実践編』（2011年）は高い評価を得ています。

『高校生のための道徳教科書』は、千葉県が平成25年度から県立高等学校での「道徳」授業の必修化に伴い、同センターの研究成果を反映させて高校生を対象にした道徳学習の副読本です。本書は一定の知識を教えることを目的にしたテキストというよりも、現代社会における「モラルとは何か」を生徒と一緒に考え、話し合うための「ナラティブ（物語）」「質問」「気づきのコラム」を提供し、高校生の共感力や想像力、自己洞察力を刺激する読み物になるように工夫されています。全国どの高等学校でも道徳教育の副読本として活用していただける内容です。

〈目次〉道徳の授業で何を学ぶのか？／遭難したメキシコ人を救った御宿の村人／命は一回限りで、唯一なもの／人間の創造力と人間らしさ／「悩み」こそ、人生にとって意義あるもの／心に残る言葉による道徳教育／見返りを求めない心／つながりの中で生きている／「生きる」とは、どういうことなのか？／働く意味を考える／夢を実現する方法／One for All, All for One—ホペイロという仕事／公共の場のマナーを考える／友だち関係について考える／人とのぶつかり合い・トラブル解決には／人とのぶつかり合い・トラブル解決には（事例編）

◇A5判変型・144頁・本文2色刷 定価840円（税込）

## 編集後記

本号は「麗澤大学のキャリア教育」を特集しました。

本学においては創立以来、人間教育（全人教育）を重要視しており、先ごろ『大学生のための道徳教科書』の理論編と実践編を出版し、実際に正規の授業で使用しています。また、キャリア教育の受講生が年々増え、大きな成果を挙げています。これらは正課の授業における人間教育であって、このほかに課外の活動、特に就職活動もまた人間教育の重要な場としてその効果に期待を寄せ、それは本学の伝統となります。

本号には学生のキャリア教育（進路指導・就職活動）を理解し、支援する教職員の手記を収めました。そこには教職員と学生がともに学びあう姿があり、麗澤教育の本質を示すものです。

■卒業生の今のコーナーでは卒業後自分の道を模索する実体験を投稿していただきました。それはすべて本学の人間教育の成果です。

■本誌によって多くの学生が、身近な事例をとおして麗澤教育の意義を知っていただき、さらにより多くの方に本学の人間教育の特色をご理解いただけるならば望外の幸せです。これはひとえにご多用中にもかかわらず、快くご執筆していただいた皆様の誠意の賜物です。ここに衷心より感謝申し上げます。

■本誌の内容に関するご意見、ご感想、ご提案などがありましたならば、麗澤大学企画広報室までご一報ください。

麗澤大学出版委員会委員長 井出 元

出版委員会委員長 井出 元

委員（外国語学部）金丸良子・佐藤繭香・町恵理子・森 勇俊

委員（経済学部）佐久間裕秋・竹内啓二・立木教夫・花枝美恵子

委員（学事部）江森 靖（総合企画部）野木清司

事務局 齋藤亜希子・松野大祐

『麗澤教育』第十九号

二〇一三年四月一日

編集 出版委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 ○四―七―七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー